
夏陰

五十嵐優哉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏陰

【Nコード】

N2385D

【作者名】

五十嵐優哉

【あらすじ】

夏休みの初日、僕は誰かに尾行されていた。おそろおそろ振り向くと、そこには白い少女がいた。彼女は僕にこう微笑みかける。「久しぶり」「五人が紡ぎ上げる、記憶を巡る物語。（鬱展開あり）

第一話：夏休みよりの使者

P a r t A : P r e s e n t i m e n t i n s u m m e r .

お天道様、僕は何か気に障るようなことをしたのでしょうか？

その質問には答えず、日差しは容赦なく僕を照りつける。
額にかいた汗が頬へ滑り落ちていく。

真夏の住宅街はときおり子供たちが僕の横を走り抜けたほかは人
気がない。

テレビの音が軒並みから漏れてくるけれど、それが人のいる証明
には思えなかった。

ただ一つ。あからさまな気配が外に出てからずっと続いていた。
背中が熱っぽく、それと同時に悪寒がする。

振り向くのも怖くて出来ない。

ただどれだけ角を曲がってもその気配が消えることはなかった。

僕、尾行されてる……？

もしかして、今僕は人生で幾度か訪れるであろう危機に直面して
いるのではないだろうか。

夏休みが午後から始まったというのにさいさきが悪い。

それにしても僕の後をつけるということは僕に何らかの目的があ
るということに違いない。

それは何だろう？誰かに恨まれる心当たりもないし、誰かを恨んだ記憶もない。

そうすると相手は誰でもいいのか。

乱暴目的だとしたら僕に立ち向かうすべはない。

でも、それだったらもつとはよい時点で犯行に及んでいるはずだ。尾行されてからもう三十分以上はたっている。

この状況を打破するためにはやっぱり後ろを振り向くしかないのか。

さっき逃げようとしたものの、すぐに追いつかれてしまった。

僕は意を決する。

なるべく面倒なことになりませんように。

道の真ん中で立ち止まり、僕は回れ右をした。

そこにいたのは少女。

背は中学生ぐらいで、顔の作りも幼く、つぶらで輝く瞳は僕へとまっすぐ向けられている。

目が合い、僕は逃げるように視線を外した。

白が映えるワンピース姿の彼女は線の細い体をしていて、それをかばうように腰まで伸びた長い髪が広がっていた。

赤いスニーカーが幼さをさらに印象づける。

斜めにかぶった広口の麦わら帽子が少し不格好だと思った。不意に突然強い風が吹き、彼女の帽子が空へ舞い上がった。

僕たちは空を見上げる。

空は雲一つない晴天だった。

恐怖やいぶかしさはいつの間にか消えていた。

僕はただ、目の前の彼女に見とれていた。

さっきまで尾行されていたことすらも忘れかけてしまう。

彼女はずっと僕を見つめていた。

僕も視線を彼女に向ける。

彼女は屈託のない笑みを浮かべた。

その微笑みを僕は知っている。

けれどその記憶にはもやがかかっているのはつきりしない。

僕は何かを言葉にしなければと思った。

しかし、何を言えいいのだろうか？

挨拶？尾行の理由？何か違う気がする。

結局僕は黙り続け、彼女が先に口火を切った。

「久しぶり」

ああ、やっぱり。

君は僕を知っていて、僕は君を知っていないくちやいけない。

なのに僕だけが彼女のことを忘れてしまった。

僕は強い眩暈を感じ、気を失ってしまう直前に多分こう返事をした。

「うん、久しぶり」

それからしばらく時間がたち。

僕らは住宅街の中にある小さな公園にいた。

彼女がここまで連れてきただろうか。

聞いても仕方のないことのような気がして、質問はしなかった。

僕は公園のベンチで横になっていて、その目線の先には慈しむように僕を見つめるきれいな双眸があった。

さつきからずっと視線が僕へと向けられていることに気づくと、僕の頬は確かな熱を感じた。

頭が痛くないということは膝枕されているということだろうか。

僕の髪をなでる小さく暖かな彼女の手のひらが心地よい。

また眠りそうになる僕を起こすように、けれど決して強くない口調で僕をたしなめる。

「びつくりしたよ、いきなり倒れちゃうだもん、君」

僕が一言謝ると少し険しくしていた表情をすぐ和らげ、彼女はまた髪をなでた。

「でも、よかった……全然変わってないね、しゅうちゃん」

懐かしい呼び名のはずなのに、僕はそれを思い出せない。

ねえ、僕はこんなに変わってしまったよ。

そのことに気づいたとき、君はどうするの。

僕が打ち明けたときどういう反応をするの。

僕は君のことを全く思い出せないなんて。

そう思っていることを見透かしたように、彼女は口にした。

「大丈夫、君はきっと思い出す。この街に住んでいたわがままな女の子のことを。あの夏に起きた出来事を。だから、ゆっくり思い出していけばいいよ。だって、夏はまだ始まったばかりなんだから」

それは夏の昼下がり、七月の終わりのことだった。

第二話：膝枕

そろそろ足がしびれてきたかも、と彼女が舌を出したので僕は慌てて身を起こした。

さつきからずつと顔がほてっている。

おまけに言葉も出てこない。

しばらく沈黙が続いて、僕はいたたまれなくなった。

出来ればこの状況から逃げ出したい。

どうすべきか悩んでいると突然彼女が破顔した。

「この感じも変わらないね、しゅうちゃん。君、あんまり言葉数少なかったからすぐだんまりになっちゃうんだよね。でも、心地よかった」

ただでさえ言葉が出てこないのに、緊張するとさらにその性格がひどくなる。

そのせいで人を不快にさせてしまうこともしばしばあった。

それを受け入れてくれたのは数少ない友人と、目の前にいる少女だけだった。

不快になるところかこの沈黙を心地よいと言ってくれる。

「ボク、香西秋乃。ほんの一週間前まで入院してたんだ」

そう言ってうつむく彼女。

笑みを絶やしてはいないけれど、どこかぎこちない。

「病気だったの？」

彼女は首を振る。

「事故だった。ちゃんとしたことは覚えてないんだけど、交通事故とは違うみたい」

僕は曖昧に頷き、次の言葉を探す。

そうしている間に彼女は言葉を続けていた。

「四年間も眠りっぱなしだったから、ほら、ボク全然成長してない」

自分の頭をなで、ぱつが悪そうに微笑んだ。

僕はそこで不思議なことに気づく。

四年間も眠っていたというのに、たった一週間のリハビリで体が動くようになるのだろうか。

僕の周りでは聞いたことのない話だ。

そのことを尋ねると彼女は僕へと身を乗り出してきた。

満面の笑みがわずかな距離の先にある。

「お医者様も驚いてた、『君みたいな子は初めてだ』ってね」

わざわざ声を太くして医者まねをするものだから、僕は思わず吹き出してしまった。

秋乃は怒るかと思ったが、むしろ目を丸くした。

そして柔らかく頬をゆるめる。

「しゅうちゃん、やっと笑ってくれた」

その純真な瞳に吸い込まれそうになる。

ほてった顔がさらに熱を帯びていくのが分かる。

僕がしどろもどろしていると話を打ち切るように視線をあげた。

「さて、ボクには一つ困った問題があるんだよね。お医者様はリハビリまでは見てくれたんだけど、そのあとまでは保証してくれなくてね。ボクは家の人がすぐ迎えに来てくれるだろうと思ってたんだけど、全くその気配がないんだよね。治療費も滞っていたらしくて、ボク、病院から追い出されちゃった」

僕の方に向き直って、握りこぶしをこっぴどく自分の頭に軽くぶつける。

そんな状況にした親族にも問題があると思うけれど、それを苦にもせず微笑んでいる彼女も彼女だと思う。

「それで、僕のことを探してたの？」

「うん、もちろん最初はボクが前に住んでいた家へ向かった。けれど……」

前住んでいた場所に家はなかった。

そこにあつたのは空き地。

施設に身を預けるといふ選択肢もあり、それを選ぼうとしたとき不意に僕のことを思い出したのだという。

「もちろん、いきなり失礼なことをしようとしているのは分かっているから、しゅうちゃんに言われれば施設に行く。こうやって会えたのはただの偶然だし、きっとしゅうちゃんも迷惑」

「いいよ」

はつきりとした返事に、秋乃は目を丸くしていた。
当然といえばそうかもしれない。

さっきまで黙りこくっていたのだから。

僕自身、ここまでちゃんと意志を見せることはあまりない。

「ただ、どうなるかは奈々姉の返事次第なんだけどね。奈々姉のことは覚えてる？」

彼女は頷く。

「とっても優しくて、みんなの人気者だった人だよね？」

「いや、確かに人気はあったけど、優しいとは思えない……むしろ傍若無人？」

そんなこと言っちゃって、お姉ちゃん聞いてるかもよ？とちやかす秋乃。

確かに、あの人のことだからそれぐらいの地獄耳は持っていそうだ。

「じゃあ、そろそろ案内してくれるかな？お姉ちゃんにはやく会いたくなってきた」

ベンチから立ち上がり、彼女は僕に手をさしのべた。

その手を掴み、僕は秋乃に微笑んだ。

彼女の小さな手のひらはひんやりとしていて、心地よかった。

そう、まるで僕の沈黙のように。

第三話：訪問者

二人がいた公園から少し外れた住宅街。

ゆったりとした坂を登った一角に僕の家はある。

なんてことはない普通の一軒家に姉と二人暮らし。

たまに幼なじみの女の子が遊びに来る以外は女性を家に上げたことはない。

第一、彼女は幼稚園のころからの腐れ縁だから、女の子というよりも男友達のような感覚だ。

秋乃は奈々姉のことをおぼえていると言ってたから心配はなさそうだけど、しばらく住まわせてくれとなるとまた事情が変わってくる。

果たして彼女は承諾するのだろうか……。

「どしたの？そんな難しい顔して」

一人でうじうじと悩んでいると秋乃がとなりから上目遣いでのぞき込んできた。

僕はあわてふためきながらもなんでもないと答えた。

彼女はそれだけで納得したようで、目線を坂道に戻すと背伸びをした。

腕の細さが目立つ仕草だった。

それは、何年も運動をしていなければそんな体になるだろう。

白い肌は日差しにまばゆく輝いていた。

僕のブレザーがくすんで見えるのは決して汚れだけじゃない。

彼女の仕草を見ているうちに家に着く。

心配事はいつの間にか杞憂へと変わっていた。

玄関を開けると思わず秋乃が顔をしかめた。

そして耳を押さえる。

僕は慣れっこのなので彼女を玄関に残してオーディオの音量を下げてダイニングへと向かった。

ソファに体を預けて目を閉じている同居人に声をかける。

彼女はいかにも不機嫌そうに眉を寄せ、僕を見上げた。

さっきの女の子とは違って全くかわいらしさというものがない。

「人が気持ちよくしているところをお前ってやつは、ことごとく邪魔するんだな」

「あんだけポリウムあげてたら近所迷惑でしょ。まずは人のことを考えた方がいいよ」

「むかつく」

ふて寝をする彼女。

どうしたものかと僕は頭をかく。

「悪かったよ奈々姉。今度は確認してからオーディオをいじることにする」

「わかればよろしい」

本当、この人は扱いづらい。

話が出来ない人ではないのだけれど、一度意見が食い違えば一歩も譲らない。

いつも折れるのは僕だ。

今度はふて寝ではなく、睡眠に入ろうとする。

昼寝の時間らしい。

思い出したように壁時計で時刻を確認すると、午後二時を回ったところだった。

「ちょっと待って、奈々姉に用事があったんだよ」
「なんだ、下着ならやらないぞ」

誰がいるか。

僕は姉が少しいらだつ程度に言葉を返したあと、簡単に今日あったことを伝えた。

炎天下の住宅街で出会った少女のことと、彼女には帰る場所がないこと。

できればしばらくこの家でかくまって欲しいと言うこと。

一通り話し終えたあと、奈々姉はひとしきり唸ったあと、一つ頷いた。

「まあ、あの子の悩みなら聞いてやってもいい。ただし、夏休みの間だけだ。それまでに親戚だかなんだかの引き取り手を見つける。それなら別にかまわないぞ」

僕が秋乃を呼びに行こうとしたとき彼女はすでにダイニングの前まで来ていた。

奈々姉の姿を見つけるやいなや細い足で駆けだしていく。

立ち上がった奈々姉にそのままダイブ。

奈々姉はひし、とその体を抱きしめた。

息を吸い込んで秋乃は満面の笑みを浮かべる。

「奈々おねえちゃんひさしぶり！」

いつもしかめっ面の奈々姉が頬をゆるめている。

どうやら秋乃は受け入れてもらえたようだ。

奈々姉は困っている人を放っておけない性格だから断ることはな
いと思っていた。

もう心配はいらないみたいだ。

近況報告中の秋乃をいったん制し、僕はひとまずこの家についての説明をしようとした。

「ああ、いいよ。家の説明は私の方でしておく。お前にはしなければいけないことがあるんだ」

僕が小首をかしげると、それが逆鱗に触れたらしく、殺気のこもった表情を僕へと向けた。

「お使い、忘れたのか？」

血の気がさつと引く。僕は慌てて家を飛び出していった。

CDを買いに行くのを忘れていた。というか何で予約という便利な機能を利用しないのだろう……。

約束通り初回限定版のCDを買い、家へと舞い戻る。

二人はすっかりうち解けた様子で会話に花を咲かしていた。

姉にジャケットを渡し、彼女は早速それをオーディオのトレイの上にした。

聞き覚えのある邦楽を背に（音量は控えめにしてあった）、二階にある自室へと向かった。

第四話：遭遇

自室に戻る途中でざっと今日のことを振り返ってみる。
あまりに唐突なことで焦点がうまく結びつかない。

秋乃は僕と再会したけれど、僕は彼女のことをおぼえていない。
それでも彼女を僕の家へ迎え入れようと思ったのは、奈々姉ならば秋乃が嘘をついているのかどうかかわかると思ったからだ。

僕と違って記憶喪失になった経験はないし、頭脳だって明晰だ。
姉さんの反応やそのあとの上機嫌さも嘘には思えなかった。

何でこんなまでも秋乃のことを疑っているのだろう。
僕は自分がつまらない人間に思えてきて、それ以上は気にしないことにした。

二階の奥の部屋、ドアを開けて自室に入る。

奥手の窓の近くに並べられたベッドと机、あと扉を開けてすぐの場所にある本棚ぐらいいしか調度品はなくて、友人を招くたびに『殺風景だ』と評される。

けれど、今日は何かが増えていた。

「あれ、こんなぬいぐるみ持ってたかな僕」

ぬいぐるみというか、本物を模したような人形。

実物大の大きさを持つそれはフローリングに寝そべって僕の持っているマンガを読んでいた。

正確に言えば腐れ縁の女の子が僕の本棚に勝手にしまったものだった。

ちなみに僕の本棚の半分以上は彼女の本で占められている。

そして人形は器用にポテトチップスをつまんでいる。

正確に言えば僕が奈々姉に見つからないように隠しておいたはずのものだった。

ちなみに隠し場所は誰にも教えていないはず。

僕はそれを間違つて蹴つてしまわないように注意しながらベッドへとこしかけた。

「つておーい！私のことはまるつきり無視なわけ！？」

「ぬいぐるみがしゃべっ」

人形の見事すぎる右アッパーが僕のあごをえぐる。

それはさすがに意識飛ぶと思うんだけど……。

……目を覚ますと怒り心頭のご様子で眉をひくつかせる女の子がいた。

「ほんと冗談ですだからそんな怒らないで許してはもらえませんか」
「嫌だ」

彼女の顔を見たときに床に頭をこすりつけてまで許しを懇願している僕へと冷たい一言が浴びせられる。

「さっきのは冗談でも許さないんだから。どんな目の構造してたら人形扱いできるのよ」

「本気で怒った？」

「もし櫻井に同じことを言われてたら彼の存在を消去してたわね」

僕だから命拾いしたものの、僕の友人だった場合には……。僕は身震いしながら面を上げる。

彼女の怒りは収まったのか、苦笑に変わっていた。

「まあ私の秀一に対する寛大さに感謝しなさいよ」

嘲笑にも見えてくる彼女は肩まで伸びた栗毛を片手の人差し指でかき上げながらも一方の手を僕へと差し出した。

「でも袖季、部屋に入るときはあらかじめ連絡しておいてくれると嬉しいんだけど」

「あれ？奈々姉には言っておいたけど」

……どうやら姉とのコミュニケーション不足が生じていたようです。

というか、僕の忘れ癖は姉譲りみたいだ。

「とにかく、今回のボケは封印しておいた方が身のためだと思うよ」
「うん、そうしとく」

そう返事をして僕も本棚から小説を取り出して続きから読み始める。

しばらく読み進めたけど、彼女に肝心なことを聞いていなかったことに気づいて本を閉じた。

「ねえ袖季、今日はなんの用事で来たの？」

彼女はしばらくあごに手を当てたあと、

「ん………忘れた」

あっけらかんと彼女は肩をすくめた。

「別にいいでしょ、きつと本を読みたかったのよ、秀一の部屋で……ああ」

何か思いついたのか薄笑いで目を細める柚季。

「それとも、『私、秀一に会いたかったのっ!』とか言っただけだったの? ちょっと気持ち悪いわよ」

そんなこと思いつきもしなかったけれど。

「第一なんで柚季にそんなこと言わなきゃいけないのさ?」「うわ……冗談だっていうのに」

さっき見たような展開だということに気づき、二人は忍び笑いをした。

互いの共通点。

「冗談は平気で言うくせに、いざ自分が言われると本気にとってしまっ」

しばらく夏休みの計画を二人で話し合いがてら雑談する。すっかり話しこんでいて、ドアが開いていたことに気づかなかった。

気づいたときには遅く。

「ねえ、私質問があるんだけど」「ん?」

「……彼女は、どちらさまで?」

失念。扉の前には目を丸くしている秋乃が首をかしげていた。

第五話：関係

一番最初に柚季へ説明しとけばよかった。

隣の柚季は怪訝な　　ほぼ睨んでるに近い　　目線を僕にぶつけてくるし、戸口の秋乃は秋乃で見てはいけないものを見たように申し訳なさそうに俯いていた。

何処か気まずい空気を醸し出す夏の夕暮れに、僕たちはいた。

……　　ってかつこよくまとめている場合じゃない！

二人はどうやら初対面のようなだし、ダメ元でも今から説明すれば柚季も理解するはず。

僕が秋乃のことを説明しようと口を開こうとしたとき、

「お二人さんって、その……お付き合いされていらしたんですか？」

秋乃が思い切った勘違いを口走っていた。

というか、初対面だったら自己紹介が先だと思う。

柚季が急激に頬を赤くしたあと、僕の背中を豪快にたたく。

ほ、骨が……。

「そっそんなわけないでしょ、こいつとはただの腐れ縁。……で、あなたは？」

そう柚木に振られてから気づいたのか、秋乃は顔を上げ自己紹介をした。

「ええと、はじめまして。香西秋乃って言います。年は十七で、しゅうちゃんとは五年ぶりに会ったんです」

しゅうちゃん、という単語に柚季の眉がぴくりと引きつる。けれど、それよりも気になることがあったのか、柚季は質問を重ねる。

「家はこの辺なの？あ、私たちも秋乃と同じ年だからタメ口でかまわないわよ」

柚季は両方のことに頷きを返した。

「ふーん……だったらなんで五年も会わなかったの？」
「それは……」

困ったように僕へと視線を流す。

きつと、自分の苦労話なんかを彼女に話してしまってもかまわないのだろうか、と悩んでいるのだろう。

だから僕はゆっくり頷いた。

大丈夫。

僕の表情を見て安心したのか、秋乃は言葉を続けた。

「ボク、中一の夏からずっと入院してたんだ」

「なにか……重い病気だったの？」

「ううん、事故。どんな事故だったかはおぼえてないんだけど、交通事故じゃないみたい。とにかく、五年もの間ずっとボクは眠り続けてた。目覚めたとき、ボクには何も残っていなかった。……ボクの家族はボクをおいて何処かへ行ってしまったんだよ」

柚季がにわかには信じられないといった顔をする。
家族に対する怒りからか、眉間に皺が寄っていた。

「そんなとき、しゅうちゃんと再会したんだ。もつとも、しゅうちゃんもボクのことをおぼえてはくれなかったんだけどね。それでも、しゅうちゃんはしばらくボクをこの家に泊めてくれるように言ってくれた」

「そう……はい？」

秋乃が首をかしげる。

僕も首をかしげた。

ふざけるなど言わんばかりに柚季は僕を睨み付ける。

「あんた……うまいこと秋乃を言いくるめて彼女のことを襲おうだなんて考えてるんでしょ？」

「え……そうなの？でも、ボク、しゅうちゃんとだったら」

「んなわけないって！秋乃もさらにボクの状況を悪くさせるようなこと言わないでっ、あ、ちゃんと奈々姉には承諾をもらったから」

柚季は悩むようにうんうん唸ったあと、手を打って納得した。

「大体、秀一はそんな甲斐性持ち合わせてないしね。とにかく、これからよろしくね、秋乃」

秋乃は差し出された手のひらをゆっくり、そしてしっかりと掴んだ。

そのとき柚季の目に何かかげりのようなものが見えたのは、僕の思い過ごしだったのだろうか……？

さっきは僕のことを甲斐性なしだと言ったくせに、襲われないように気をつけなと秋乃に釘を刺す柚季を見送った。

微笑みを絶やさない女の子は僕へ話しかける。

「とってもいい人だね、柚季ちゃん」

柚季にちゃんづけするやつも珍しいな、と思いながら僕は頷く。

「うん」

僕が記憶を失ったとき、そばにいて励ましてくれたのが柚季だった。

急に自分がわからなくなったときに、彼女は僕の不安を取り除いてくれた。

中学生なりの、精一杯の言葉で。

中学生。

柚季のことを思い出すついでに、秋乃との共通点を見つけた。

「ねえ、秋乃が事故に遭ったのって中一の夏って言ってたよね？」

「うん」

「僕が記憶を失ったのも、中一の夏のことだったんだ」

僕はその夏に、何か大変なことがあって、それから。

「しゅうちゃん」

思わないほど強い口調で秋乃に呼ばれる。

僕は思考をやめ、秋乃の言葉を待った。

「まだ、夏は長いよ」

確かに記憶を取り戻すことは大切だけど、まだ待つて欲しい。

「急ぐことはないから……」

わがままにも思える秋乃の言葉に、僕は頷くことしかできなかった。

第六話：境界

「ねえ、森の奥へ行こうよ」

誰かが僕の手を引いていた。

僕の家近くの公園は広く、森と一続きになっていた。大人の人には入っちゃいけないと言われていた。だから僕は首を振った。

「大丈夫」

誰かはそう言っていやがる僕の手をさらに引く。

互いに意固地になっていると誰かはぱたりと手を弱めた。勢いで僕は尻餅をついた。

誰かが僕を見下ろし、意地悪そうに微笑んだ。

「そっか。しゅうちちは怖いんだ。男の子のくせに」

そのまなざしはどこか威圧的で、僕は言葉を失う。それでも、自尊心を傷つけられた気がして、僕は言い返そうとする。

でも結局、僕は森の奥へと。

『しゅうちゃん』

え？

聞き慣れないはずの声に僕は目を覚ます。夢を見ていたんだ……。

僕は朝日を白いカーテン越しに見ながら、身を起こした。

「しゅうちゃん、おはよ」

「う……今、何時？」

「えーと、八時」

「寝る」

間髪入れずに僕は体を布団の中へ滑り込ませた。

慌てて僕を揺り動かす秋乃。

せつかくの夏休みなんだ。

秋乃には悪いけれど、午前中ぐらい眠らせて欲しい。

しばらく秋乃の無邪気な拷問に耐えているとやっと諦めたのか揺らされることはなくなつた。

けれど、

「もう……えいつ」

僕が甘かった。

彼女は僕に馬乗りしてきた。

「だめだよ」

「……なにが？」

「夏休みだからこそ、早寝早起きしなくっちゃ。ほら、ボク早く起きちゃってヒマなんだよー」

二度寝すればいいじゃない。

「いやーしゅうちゃんと違って二度寝できなくてねー」

そう言う秋乃はすねたように口をとがらせる。

「これ以上寝るんだったら、ボク、いたずらしちゃうから」

無言で目をつぶり直す。

「マジックペンでいたずら書きしちゃうから。肉とか書きちゃうから。湿った布で鼻と口ふさいじゃうから」

「最後の死んじゃうでしょ！」

突っ込んだ時点で僕の負けだった。

「だって起きないんだもん。つまんない」

「二度と起きなくなっちゃうよ！」

さすがに子供のいたずらで殺されてはたまらない。

僕は二度寝することを諦めて秋乃に付き合うことにした。

薄いピンクのパジャマを着た秋乃は落ち着きのない子供のよう
に足をぱたつかせている。

（これで僕と同年なんだもん……）

奈々姉の私物とは思えないパジャマは秋乃に合わなかったらしく、袖口に腕が隠れてしまっている。

寝癖を整えていないのか髪はぼさぼさだし、眠れないという割にはしょっちゅうあくびをしている。

どう頑張ってみたところで中学生にしか見えなかった。

もちろん、今まで入院していたから成長できなかったのだろう。

……あんまり気にしないようにしよう。

僕がそう心に決めた矢先、秋乃が上目遣いで尋ねてきた。

「やっぱり、ボクって子供っぽいのかな？」

「え？」

「だって、しゅうちゃんがボクを見る目線がさ、まるでパパみたいなんだもん。あ、別にボクのパパにしゅうちゃんが似てるっていう意味じゃないよ？」

なんていうか、すっごく下に見られてる感じ。

そう不服そうに言って、秋乃は顔を伏せた。

僕は意識していなかったけれど、謝っておいた方がいいのかもしれない。

そう思って頭を下げると秋乃はさらに機嫌を悪くした。

「やっぱり、ボクのことそういうふうに見てたんだ」

「そういうつもりはなかったんだけどね……」

口をとがらした彼女はしばらく思案したあと、一つ頷いた。

「今回は、許してあげる。でも、今日からボクのことをしゅうちゃんと同じ年の女の子として見てほしいんだ。……これってわがままかな？」

僕は首を振る。

「じゃあ、約束！」

二人は指切りしようと指を絡ませた。

でも、指切りができない。

彼女は強く絡ませた指で僕を引き寄せようとする。

僕はなぜか、それを抵抗できずにいて、そして。

『おい、飯だぞ』

一階から響く奈々姉の声に慌てて僕から離れる秋乃。
返事する声が震えていた。

僕は何も出来ずに彼女を見ている。
彼女は何をしようとしていたのか。

「ねえ、森の奥へ行こうよ」

誰かの声が、僕の胸の中でリフレインした。

第七話：予感

昼になるまですることがなかった僕たちは何をするわけでもなくぼんやりと暇をつぶした。

僕はノートパソコンを立ち上げてインターネットをして。

秋乃は僕の部屋で柚季のマンガを読みながら。

時折秋乃がマンガにツッコミを入れてそれに僕が答えてやる以外は静かな時間を過ごした。

……少し、ぎくしゃくしている。

取りつくろうことが苦手な僕は彼女の顔を見るたびにさっきの出来事を思い出してしまう。

出会ったときから、秋乃のことは無邪気な子供のように感じていた。

確かにそれは認める。

けれど、僕が考えているよりも彼女はずっと『大人』なのかもしれない。

今はそう感じている。

女性関係に疎い僕にだって、これから何をされるかは気付いていた。

でも、それ以上に、突然見せた違う表情に圧倒され、動けなかった。

力が抜けた。

あのまま、奈々姉が僕たちに声をかけなければ、きっと秋乃は僕にキスをしたのだろう。

それは秋乃にとっては自分のことを子供扱いした罰だったのだろうか？

それとも

……それは、自惚れっていうやつかもしれない。

だから、それについては考えないことにした。
そんなことより、あの時僕は。
彼女と『そうなる』ことを望んでいたんじゃないのか……？

僕は秋乃のことをどう思っているのだろう。

僕は自分のことがよくわからない。

語弊があるかもしれないけれど、僕は人を好きになったことがない。

自分の気持ちがわからないから。

自分の気持ちもわからないのに、相手の気持ちなんてわかるはずがないと思ったから。

そんな人に、恋をする資格なんてないと思う。

恋をしたことのない人間が、声を大にして言えることではないけれど、恋という存在を知ったときに僕はそう心に決めた。

それなのに、僕はキスをされて、秋乃の想いのなすがままにされようとしていた。

もちろん、『秋乃の想い』と言ったところで現実にはならなかったので、本当はどうなったかなんてわからない。

けれど一つだけはつきりしているのは。

僕はその展開を心のどこかで考えていたということだった。

……こんなに僕ってオメデタイ人間だったけ、と自問自答してみ

る。

きつと、秋乃の行動に舞い上がっているだけだ。

そう結論づけて、僕はうじうじと悩むことをやめた。

秋乃に目線が行かないようにと使っていたパソコンのウィンドウを閉じる。

そして、彼女を笑顔で促した。

「秋乃、そろそろいいっか」

僕の微笑み方が変わったのか一瞬ためらいがちな笑顔を僕に向けて、そのあとすぐに頷いた。

「って、あんたら思いっきり一時間遅刻なんですけど」

駅前の時計台を見ると短針が1を過ぎたところをさしていた。

「そうだったっけ……？」

「昨日の夜にメール送ったの読んでないでしょ」

そういえば、昨日真夜中近くにメールが来てたような……。僕は慌てて携帯を開く。

そこには未開封のメールが一通あることを示すメッセージが表示されていた。

「ってというか普通メール来たら即チェックでしょ。そうじゃない、秋乃」

突然話を振られたことに驚いたのか体を震わせて柚季の方を向いた。

話を聞いていなかったみたいで、彼女は改めて尋ねる。

柚季はあきれがちに溜め息をつきながらも尋ねなおした。

尋ねなおしたところで秋乃は首をかしげるだけだったけれど。

そもそも、彼女は携帯電話を知らなかった。

話がそっちに移り、遅刻のことはどうでもよくなっていた。

僕たちはファミレスで簡単な昼食を摂ったあと、街へと繰り出した。

五年ぶりの街、その案内をしようと思いついたからだった。

ちなみに提案は袖季から。

そのことを秋乃に言うのと袖季は照れくさそうに頬をかいた。

最初はいやがっていた『袖季ちゃん』という呼ばれ方もいつの間にか定着して、そう呼ばれるたびに袖季がくすぐったそうに笑う。

なんだかほのぼのしていて、心地よかった。

相変わらず空には照りつける太陽が僕たちを汗かきにさせていたけれど、その暑さも和らいでいくような気がした。

秋乃は五年前とはだいぶ変わった街並みを感慨深く眺めていた。
増えた交通量に、建ち並ぶビル。

今は空きビルになってしまった場所。

三人は以前大型のスーパーマーケットが入っていた、現在は集合型のショッピングセンターになっているビルに入ってウィンドウショッピングをすることにした。

僕は上の階にある書店とCDショップぐらいしか用事がなかったけれど、女の子と一緒にだと自分の用事だけを先に済ませるわけにもいかない。

三人で女の子向けの洋服屋に行き、二人に感想を求められる。

似合うかどうかと聞かれても、センスが皆無の僕はお世辞程度の感想しか思いつかない。

その感想を聞いて、二人はもつといい感想がもらえるように努力する、というループが作られ始める。

それは別に悪くなかったのだけれど、時折感じる突き刺さるような視線が痛かった。

どうも僕はハーレムしていると勘違いされているようだ。

男と目が合うと『自分はどうせ負け組ですよ』みたいなオーラを出しながら舌打ちされるし。

彼女がいなのは自分も変わらないのだけれど。

いろいろと気疲れして全く楽しめなかった僕をよそに、二人はまるで姉妹のように談笑し合っていた。

店を出ると、見知った顔に会った。

僕は太柄な男に向かって手を振る。

人波の中向こうも気づいたのか手を振り返してくれた。
と、視線が僕から移動したのがわかった。

柚季へとじゃなく、秋乃へと。

僕は秋乃へと視線と移す。

彼女は目を点にさせていた。

まるで初対面だといわんばかりに。

街中、いびつな四角が形作られようとしていた。

第八話：記憶

大柄な男は僕たちのところまで来ると再び僕に視線を向けた。
何かを諦めたような、苦い表情を見せたけど、すぐにそれをかき消す。

へらへらとした顔で彼、櫻井健は挨拶をかわす。

「昼間っから女の子二人も連れて、俺に対しての嫌みか？」

「別にそんなつもりはないけど……？」

ま、ご苦労なこつたと早々話を切り上げる。

僕は嫌みな態度がいつもの冗談だということを知っているので気にしない。

ただ、その次の行動だけが気になった。

彼は秋乃をまっすぐ見つめる。

たじろぐ少女。

危機感を感じたのか柚季は櫻井を睨みつけている。

そして、彼は口を開いた。

「あのさ、いきなり変なことを言うのかもしれないんだけど、聞いてほしい」

「はい？」

まるで愛の告白でもするのかと勘違いしそうなシチュエーション。
秋乃が必要以上に身構えるのも無理はない。

「俺、櫻井健って言うんだけど、憶えてないかな？」

いつも僕や柚季に見せるへらへら顔はしていなかった。

一年に見るか見ないかの真剣な顔。
多分本気なのだろう。

だから、秋乃も警戒心を解き彼のことについて思考をしているように目をつむった。

そして、

「ごめんなさい、ボクはあなたのことをおぼえていません」

そう、丁寧に返事を返した。

櫻井は唇をかみしめ、少しうつむき、憶えてないなら構わないよと気丈な言葉だけを返した。

秋乃はその言葉を、否定した。

「構わなくなんか、ないよ」

「え？」

なぜかファイティングポーズをとっている柚季を制して、秋乃は櫻井の手を取る。

「構わなくなんか、ない。だって、君はボクのこと、知ってるんだよね？」

「あ、ああ……」

「でも、ボクは君のことをおぼえていない。それって、とっても悲しいことだと思う」

櫻井はただ黙って秋乃の言葉に耳を澄ませていた。

「だからボク、絶対君のことを思い出すよ。だから、よろしく」

握手。

その上に、涙の雫が降った。

「もしすべてが元に戻ったら、昔の二人でいよう」

まるで聖母のような微笑みをたたえる秋乃に、櫻井は子供みたく一つ頷いた。

それから四人で行動した。

さっきの流れから、秋乃と櫻井、柚季と僕という二組に分かれる感じにはなつたけれど、別に悪い空気ではなかった。

記憶の手かがりがほしいのか単に仲良くなりたいのかはわからなかったけれど秋乃は櫻井を質問攻めにしていた。

今度は彼の方がたじろいでいる。

観光案内もそこそこにぶらぶら街並みを散歩する。

駅前通りをまっすぐ行つたところにある大きな川の河川敷で、日陰になっているところになっている場所を見つけたので一時避難する。

そこにあつたベンチに櫻井と秋乃を座らせる。

「お前らは座らないのか？」

「あら、珍しく気が利くセリフね、でもいいわ。私たち、ジュース買ってくるから。何がいい？」

櫻井はあからさまに怪訝そうな目をあえて僕に向けて難しい顔をして頷いた。

注文を聞き、僕たちは二人から離れていった。

秋乃は河川敷をおりてすぐの場所にある自販機を通り過ぎて、ショッピングセンターのある方向へ戻っていきこうとする。

「あれ？ジュース買わないの？」

訳のわからない僕に向かって柚季が大きな溜め息をつく。

「あんだねー、そんなの単なる口実に決まってるでしょ」

「じゃあジュース買わないの？」

「買うわよ？……あんだ、真性のニブチンね、せつかく二人仲良くしてんのにあたしらみたいな邪魔者がいたら迷惑でしょ」

そう言われて、やっと理解する。

二人っきりの時間を作るために、柚季が画策したのだった。思わず、感想が漏れる。

「柚季」

「何よ」

「柚季って、ほんといいやつだね」

僕として真面目な感想だったのだけれど、柚季は眉をひそめた。

「……それ、すごいけなされてる気がするんですけど」

「えっ、そんなことないって」

「わかってるわよ、別に。それにしても、することがないわね」

「明日の買い物、今日すましちゃえば？」

明日、柚季の買い物に付き合う用事を思い出し、僕は提案した。それに対して首を振る彼女。

「そこまで余裕ないわよ。それに、……やっぱなんでもない」

言葉を濁す柚季を少し不思議に思ったけど気にしないことにする。

「あら、どゆちゃってピタをつぶしましょ？」

柚季はそう言って、微笑んだ。

第九話：悪戯

朝が来て、陽の光で自然と目が覚めた。

昨日のことを思い出してしまった訳じゃないけど、一度目がさえてしまったら眠れなかった。

目覚まし時計を覗くと八時を回るところだった。

ベッドから起き上がり、カーテンを開ける。

窓を開けると生ぬるい風が肌に伝わって今の季節を教えてくれる。

セミの声、街の喧噪、強い日差し。

僕の日が少しずつ始まっていく。

背伸びをするとノックの音がした。

僕は承諾の返事を返す。

「もう起きてたんだ」

「うん、なんかはやく目が覚めちゃって」

秋乃は青と白のストライプのパジャマを着ていた。

一見男の子と勘違いしそうになる。

というよりも、服自体が男の子向けのもののようにだった。

扉を閉め、窓側に立つ僕に疑いの笑みを向ける。

「どうせまたいじわるされるとか思ったんでしょ？」

半分は図星なので反論はしない。

秋乃はしばらくあごに手をやって考える仕草をしてから、質問を重ねた。

「……ねえ、昨日の続き、してみる？」

僕は思わず秋乃を見返してしまう。

あからさまな僕の動揺に、彼女は笑みを崩さない。

「指切りの続きを、しょうか」

彼女は僕へ近づき、僕の手を握る。

小さく、少し冷たい手。

僕のおぐぐらいの場所に彼女の頭がある。

そんな秋乃は僕へとまっすぐな視線を向け、目を閉じる。

「しゅうちゃんも、目を閉じて……恥ずかしいから」

甘い声に促され、僕も目を閉じる。

しばらく無音が続く。

やがて秋乃から元気な声が響いた。

「えいつ」

と、次の瞬間。

僕の額に強い衝撃が加わった。

「こんなことに騙されるなんて、しゅうちゃんもまだまだ子供だね。だいいちオトナなボクが簡単にキスなんて許すはずがないじゃん。まったく、修行が足りない……って、あれ？話聞いてる？おい」

えーと、話は聞こえる。

ただちよつと返事はできない。

ぼんやりした意識。

というか、秋乃はどれだけ石頭なんだ……？

僕が再び目を覚ましたときにはもう昼近くになっていた。

まずここが僕の部屋であることを確認して、目の前の暴行魔にふくれっ面をする。

「ご、ごめん……痛かった？」

「意識とんだ」

平謝りの秋乃。

よく考えれば子供みたいな彼女が、いきなりキスするはずがない。思春期特有の妄想がふくらんで、僕に罰を与えたのかもしれない。僕はちよつと怒りすぎなのかもしれない。

体は大丈夫だということを証明するために、僕はしっかり起き上がった。

「今度から、僕にいたずらするときは『今からいたずらします！』って高らかに宣言してからにしてね、そうすれば僕も準備できるから」

「うん　ってそれいたずらの意味ないよね？」

僕の考えに気づいたようで秋乃は困ったように眉を曇らす。

僕がその様子を見て苦笑し、やがてつられるように秋乃も笑った。不機嫌だったはずの僕はもうどこにもいなかった。

「あ、そう言えば昨日柚季ちゃんどこ行ってたの？ずいぶん長い間いなかったけど」

何とも答えづらくて、僕はお茶を濁す。

もちろんそれで引き下がる秋乃じゃなかったけれど。

……僕と柚季はあのあと、近くにあったゲームセンターで暇をつぶすことにした。

ゲームが好きじゃない僕はもっぱら、ゲームに熱中する柚季をぼんやりと眺めていた。

ただそれだけのことだったのに話した途端、秋乃がにんまりとする。

「へえ」

「な、なに？」

「いやあ、なんでも」

ちよつと気に入らない顔をしていたので僕も櫻井と話は弾んだのが聞き返した。

するとすがすがしいくらいの笑顔を僕に向ける。

「うん、けんちゃんのことたくさん教えてもらった。私もお返しにいろんな話をしたんだよ」

何とか、うまくいったみたいだ。

僕は安心して彼女の話に耳を傾けていると、チャイムの音が響いた。

ついでに、柚季の怒声が家を揺らした。

「ねえ、まだ怒ってるの？」

「私との約束ほっぽり出して、秋乃といちゃついてるんだもの。誰だって腹が立つわよ」

駅前通りで立腹した女と困り果てた男がいた。

僕はすっかり柚季との約束を忘れていたのだ。

彼女を一度怒らせてしまってもう手が付けられない。

反省も弁解も受け付けられないから、あとは時間が解決してくれるの

を待つしかないのだ。

パンツルツクの柚季は腕組みをして僕の前で仁王立ちする。

「とにかく、今日は荷物持ちとして私に従順することね」

返す言葉もなく、僕はうなだれた。

第十話：表情

駅前通りをしばらく行つた、河川敷にほど近いところにある四階建てのファッションビルに僕たちはいた。

柚季は洋服店を中心に回り、少々の品定めのアトで店員に声をかける。

店員がやけに緊張しているのは僕の気のせいではない。

あらかた買う商品を決めるとレジへ。

金額を提示され、柚季は笑顔でカードを手渡す。

対する店員は笑顔が凍りついていた。

そのカードはいかにも高級そうな漆黒で、地方都市のアパレル店員には縁遠いものだ。

限度額なし。

専用デスクもついてくる。

もちろん僕も一生使うことのないであろうブラックのクレジットカードだった。

「あのうろたえた顔、やっぱサイコーよね」

このカードは柚季の私物というわけではなく、親から借り受けているものだという。

彼女の両親は資産家で、彼女はそこのご令嬢。

だからといって本人以外の人間がカードなど使ってもいいんだらうか？

細かい事情はわからないけれど、使えているということはそういうことなんだらう。

そんなことよりも、今の僕の状況をどうにかしなければならなかった。

後先をかえりみない柚季の素晴らしい行動力により、僕の視界は

ふさがれていた。

柚季が先導してくれてなければすでに転倒していたと思う。
窓ガラス越しに見た僕の姿は荷物持ちというよりも宅配員のような
だった。

外に出ると熱気が襲ってきた。

寒いぐらいだと思っていた店内の空調に慣れてしまって、ビルに
入る前よりも暑く感じる。

休む暇もなく、柚季は一台の黒塗りの車を指さした。

十歩程度の距離がとても長く感じる。

他の通行人の邪魔にならないように歩みを進め、何とかいかにも
高級そうな車へとたどり着いた。

いったん荷物を置き、一つずつトランクへと入れていった。

トランクを運転手が閉め、やっと彼と目があつた。

「ご苦労様、君が仲川秀一君だね？」

僕はひとまず頷く。

自己紹介の言葉を考えていると焦っていることに気づかれたのか
彼は苦笑いした。

「君のことはお嬢さんからよく聞いているよ、いつもよくしてやつ
てくれてありがとう」

深々と礼をされ、僕はかしこまって、たいしたことはしていない
と丁寧に言葉を返した。

彼は白石家の執事兼柚季の教育係で、名前は林賢治。

細身で背が高く、フレームのない眼鏡が理知的な印象を彼に与え
ていた。

「あなたにも助けてもらってるわよ。こんな下らない用に使わせてしまつてすまないわね」

「いえ、私には身に余る光栄です」

彼の言葉に柚季が微笑む。

今まで見てきた顔の中で一番輝いているように見えた。とても自然で、どこにも曇りがなかった。

社交辞令なんかじゃ、決して作ることでできないもの。信頼できる人に見せる、優しさの顔。

少し、悔しかった。

なぜだかわからない。

ただ、いつか。

僕にもこの笑顔を見せてほしい、そんなことを思った。

僕には、それが出来るだろうか？

賢治さんを二人で見送り、僕たちは横断歩道を渡った。

長い車道を横切り、ショッピングビルが建ち並ぶ方向を背にする。反対側の通りはビジネス街。

だから片方には私服姿、もう片方にはスーツ姿の人々が多めに歩くことになる。

僕たち学生が休みを謳歌していても、平日である今日、社会人はまだ仕事をしている。

僕たちが許されていることも、もう少して終わってしまう。たとえ自由が増えるとしても、新たな制限が増えていく。

それが辛いことなのか、モラトリウムの中にいる僕にはよくわからなかった。

ビル街を横に抜けると、近代化からは取り残された商店街が顔を

覗かせる。

ほとんどの店はずっと店を開いていない。

柚季はぼんやりと閉じられたシャッターを眺め、すぐに前を向いた。

それから二人はたわいもない話を始めた。

僕はそれに相打ちを打ったり、時々自分なりの考えを述べたりした。

あの笑顔が見たくて、時折冗談を言ったりした。

それはまるで逆効果だったけれど。

やがて小さな公園に着いた。

歩き疲れた二人は休憩することにした。

そこに人気はなく、寂れた玩具が立ち並んでいるだけだった。

僕たちはブランコにこしかけ、しばらく風の音に耳を澄ませた。

しばらくして、柚季が口を開いた。

「私、あんたに言いたかったことがあるの」

第十一話：距離

初めて仲川秀一という人物に会ったのは小学三年生の冬だった。三学期が始まった初日、彼は転校生としてやってきた。

慣れない土地、強い不安もあったのだろう、彼はなかなかクラスに馴染めずにいた。

引っ込み思案な性格も災いして、友達を作れずにいた。

私はそんな彼を最初はかわいそうに思った。

いつしか、彼の友達になりたいと思った。

その時は興味本位だったり、同情心だった。

雪が本格的に降り始めた一月下旬、私は彼に話しかけた。

昼休み、教室ではトランプをしている子やグループでおしゃべりをしていたりして、活気に溢れていた。

石油ストーブは教室全体を暖めることはできず、そして彼はそこから最も遠い廊下側の席に着いていた。

一人に耐えるように本を読んでいた。

触れたら崩れそうな彼の意志にためらいを感じた。

違う。

私は彼の意志を溶かしてあげなくちゃ。

外に心を向ければ、世界は暖かく受け止めてくれることを教えてあげなくちゃ。

そして、私は彼へと微笑んだ。

やがて、たくさんの時間が経った。

彼は彼なりに大切な友達を作った。

引っ込み思案な性格は相変わらずだったけど、彼を受け入れてく

れるみんながそれを愛嬌だと笑ってくれた。

私はがんばりやさんの彼にどんどん引き込まれていった。

中学にあがり、その頃には彼を好きになってしまっていた。
初恋だった。

でも、この恋は実らない、実らせないと決めた。

私は、彼にとって大切な友達でありたかった。

今まで築き上げた関係を壊したくなくて、だから私は恋の言葉を
自分の胸に閉じこめた。

そんな甘い苦痛が続く中、事故は起こった。

夏の終わりの日、彼は交通事故に遭った。

残されたのは彼と、その日車に乗り合わせていなかった彼のお姉
さんだった。

彼は事故のあと、私に言った。

「はじめて」

彼は記憶喪失になったのだとお姉さんから教えられた。

それを受け入れたとき、私は言葉をなくした。

全部、やり直した。

私だけがこの思いを抱えて生きていく。

こんな辛い思い、私だけで十分だ……。

でも、私は前を向いて生きていこうと決めた。

彼を悲しませることが、一番辛いことなのだから。

時が軽減しない痛みなんてない。

その言葉を信じて、この日まで記憶を重ねてきた。

そして、一つの結論。

私は今、ここに誓います。

柚季が語ったのは僕の曖昧な記憶と彼女の心だった。

「ずっと、私はあんたのことが好き」

そして、僕はその告白に。

「僕は」

僕は……答えることができなかった。

彼女の真剣なまなざしから逃げて、顔を伏せた。

柚季はやがて震えた、それでも気丈な声で僕に別れを告げた。

僕は彼女を呼び止めようとした。

けれど、柚季が振り向くことはなかった。

僕の答えは決まっていたはずなのに。

迷う必要なんてどこにもなかったのに。

僕の悪い癖が露呈して、また誰かを傷付けてしまった。

それも、本当に大切にしなければいけない人を。

だけど、まだ、まだ間に合うのなら。

僕にもう一度チャンスを与えてください。

僕はそう誓って、柚木を捜すため駆けだした。

辺りがずいぶん暗くなって、ここに彼女がいないことを僕は悟った。

仕方なく、僕は最終のバスに乗った。

僕は戻れない場所にいる、その後悔したところで遅かった。

バスに揺られるたかが三十分がこんなにも長いものだとは思わなかった。

もつとも、僕には人を好きになる資格なんてなかった。

僕はこうやって人の気持ちを裏切ってしまう。

僕にそのつもりがなくても、見えない傷を誰かにつけてしまう。

その傷を、僕は袖季につけてしまった。

もう、昔の二人には戻れないのだろうか。

窓に映った僕の顔がとてもなさけなくて、苦笑になる。

やがて、涙に変わった。

彼女を振るのが怖くて、僕は言葉を遠ざけた。

大事なものが壊れるような気がして、その選択が余計に彼女を傷付けるともわからずに。

その過ちに気づき、僕は自分の膝を殴りつけた。

何をやっているんだ、僕は……！

窓ガラスに透けて映る僕は、最低な顔をしていた。

第十二話：心

いつものように食事をして。

いつものように、三人で談笑して。

いつものように日課をこなして。

いつものように、明るく、明るく。

けれど、その空元氣も二人には見透かされていた。

自分の部屋に戻り、僕はベッドへと突っ伏した。

柔らかく視界がふさがれ、心地よさに溜め息がこぼれた。

それから、もう一つ大きな溜め息。

それは心地よさからではなく、耐えきれない苦しさから溢れたものだった。

後悔が、胸を強く圧迫する。

もう柚季とは仲良くやれないのかな。

そう思ったところですでに手遅れだということにはわかっている。馬鹿みたいだ、そう思って僕はそのまま眠りにつこうとした。

「おーい、入ってもいいか？」

ゆっくり規則的に鳴るノックの音。

落ち着いた、けれどどこか間延びした声は奈々姉のものだった。

僕は慌てて明るく返事をし、ベッドから飛び起きた。

いつもの彼女ならば、ノックもせずに僕の部屋へ上がり込むのに。僕は自分が眉を曇らせてないか気にしながら、彼女と向かい合った。

にこにこと笑う僕に、奈々姉は溜め息をついた。
腕を胸の前で組み、背中を扉へと預けた彼女はあからさまに不機嫌な表情を浮かべている。

「らしく、ない」

「……え？」

「だから、お前らしくないと言ったんだ」

とりつくろうとする僕にそっと近づき、怒った顔のままで指を僕の頬に伸ばす。

微笑みが、引きつっていた。

「お前は隠すのが下手だな、でも、その隠したりしないところが秀一のいいところなんだけどな」

そう細い声で告げた彼女は眉を曇らせ、泣きそうな顔で微笑んだ。

「悩み事があるのなら、ちゃんと相談してくれないか？……秋乃だって、心配してるぞ」

おい、と扉へ呼びかける。

少しの間があつて、扉が静かに開いた。
顔を覗かせたのは苦笑いをする秋乃。

「ボクじゃ力不足かもしれないけど、できることはしてあげたいんだ」

そう言つて微笑んでくれる少女。
奈々姉も言葉を続ける。

「お前は一人じゃない。悲しみも、喜びも、三人で分け合おう」

って、こんなの柄じゃないか　そう苦笑する彼女。
自然と、笑みと感謝の気持ちが溢れた。

「ありがとう　でも、これはきっと僕の問題だから、気持ちだけ受け取っておく」

そう、これは僕が起こした過ち。
誰かに手伝ってもらうことなんてできない。

僕はどんな顔を今、しているのだろうか……よくわからなかったけれど、二人は頬をゆるめて部屋をあとにした。

今度は仰向けにベッドへ倒れ込む。

緩いリバウンドをして、沈んだ。
足だけをベッドから投げ出して、残りは柔らかさに預けて。
照明がまぶしくて、僕は腕で目を覆った。

できるだけ何も考えないようにする。

明日になれば、少しは状況がよくなっているかもしれない。
何もなかったように、笑って僕に声をかけてくれる。
きつと、きつと。

「さて、それはどうだろうね」

力なく腕を下ろすと、奈々姉が僕のことをのぞき込んでいた。

「独り言、聞こえてたぞ」

何があっただのかお姉さんに聞かせてごらん？　　そう冗談めく彼

女に誘われ、僕はベッドをイスがわりにした奈々姉の横に座った。
ここまで優しくされて、彼女を断る理由はあるのだろうか。
僕は観念したように今日あったことを奈々姉に話した。

彼女は目を閉じながらときおり頷き、僕の話に耳を傾けていた。
そして僕の話が終わったあと、彼女は静かに切り出した。

「それで、お前はそれでいいのか？」

「……」

「『僕には人を好きになる資格がないから、誰も好きになりません』
そんなこと、本当に思ってたのか？」

これが櫻井だったり秋乃に言われたことだったら彼らを払いのけていたかもしれない。

けれど、奈々姉の気持ちがわかるから、僕は何もできずに、何も言えずにいた。

僕の考えは 。

「秀一の気持ちはもう決まってるはずだ。……自分の心に、素直になっ
ていいんだぞ」

そう言う奈々姉の背中に、僕は情けない声をかけた。
馬鹿、泣くんじゃないと彼女のげきがとぶ。
今度はしっかりした声でもう一度彼女に呼びかけた。

決めたよ、僕は柚季のことを 。

第十三話：逃避

次の日は朝から掃除を手伝わされ、午前中は家の用事で終わってしまった。

柚季の家には午後から行くつもりだったけれど、こうして急な用事が入ると出鼻をくじかれたような気分になる。

昼食を摂って居間のソファでぼんやりしていると、頬に冷たい感覚が走った。

「おつかれさま。冷えてるよ、飲む？」

顔を上げると秋乃がコップを持って微笑んでいた。

棚を移動させたりと力仕事が多かったのに汗はほとんど出ていなかった。

僕は感心しながらコップを受け取る。

秋乃がテレビをつけると快音が響いた。

映し出されたのは球場で、高校球児達は必死にユニフォームを汚しながら白球を追いかけていた。

夏の甲子園に向けての地区大会の様子だった。

汚れ一つない白いワンピース　僕が彼女と初めて会った日に着てたものだ　を身にまとった少女は床にアヒル座りをして画面を観ていた。

「野球、好きなの？」

僕が尋ねると秋乃は首を振ってよくわからない、と答えた。

「ねえねえ、健ちゃんって野球部なんだよね？」

頷くと、溜め息を一つ。

「健ちゃん出てこないのかなあ、見たいなあ、健ちゃんの野球してる姿」

今年の野球部は一回戦敗退だった。

そもそも僕のいる高校の野球部は弱小と呼ばれても仕方ないほどの実力で、櫻井自体も部活を『ただの暇つぶし』だと言っていた。野球部はしばらく休みにはいるらしく、すぐには希望を叶えられそうにはなかった。

それにしても、名前を連呼しすぎだと思う。

「そっいえば、櫻井とはうまくいつてるの？」

質問してほしいような目線を投げかけていたので仕方なく聞いてやる。

その発言の途端、秋乃の目線がどこか遠くへ行ってしまう。

「すぐく、うまくいつてる」

うつとり。

曖昧な返事の意味もわからず、僕は首をかしげるしかない。

しかもその発言のあとは彼との出来事を思い出したらしく、一人で恍惚の表情を浮かべている。

仕方ないので何をしてもしも反応のない彼女からそっと離れ、僕は自室に戻った。

部屋に戻り、柚季に電話をかけようと携帯電話を取り出すと先に電話が鳴った。

櫻井からだった。

『今から俺の家に来い。一切の苦情は受け付けないからな、じゃ』

僕の意志は一切無視されました、完膚無きまでに。

どうして僕が行動を起こすたびにこう邪魔をされるんだろう……

僕は仕方なく重い腰を上げた。

歩いて五分、まぶしい光線に目を細めながら櫻井の家の近くまでつく。

目線の先、知った顔の人を見つけた。

少し、歩くのをためらってしまう。

だけど、ちゃんと次の一步を踏み出す。

ちゃんと彼女と向き合うと決めたから。

彼女も僕の姿を認める、けれど彼女はすぐに目線をそらした。

近くまで来て、僕から柚季に話しかけた。

「櫻井に用事？」

彼女は元氣なく頷く。

口をしばらくもごもごさせたあと、意を決したように答えた。

「あ、あのね、さつき櫻井から電話があつて、すぐに来いみたいな電話があつて、でもすぐ切れちゃつて。家に着いたはいいいけど呼び鈴押しても返事はないし、どうしようかなって思つて……」

どこか尻すばみな言葉。

全く同じだと僕が答えると、難しい顔をしてまただんまりしてしまった。

僕も櫻井の意図を掴めずに考え込んでしまった。

本当は言わなくちゃいけないことがあるのに、けれど早急かとも思った。

ただ、このぎこちのなさに変わりはなかった。

しばらくして櫻井が走ってやってきた。

胸の前で腕組みをした柚季がいらだたしげに詰め寄る。

それに苦笑いで受け答える櫻井。

なぜか、二人のほうがお似合いな気がした。

もちろん、二人のそれぞれの思いは知っている。

けれど、僕はこの場にはいない方がいい気がしてきて……。

さっきまでの自信が消え去っていく。

気づけば、走り出していた。

後ろから櫻井の声がしたような気がしたけれど、それを無視する。

限界だった。

僕は、また逃げ出した。

とにかく、一人になりたかった。

誰の想いにも答えたくなかった。

いつそ嫌いになれたら。

しばらく全速力で走ると、見覚えのある公園があった。

公園の奥は森につながっていた。

本来ならば立ち入り禁止になっている場所だった。

僕はその警告を無視して森の中へと入っていく。

松林の青臭さでのどが詰まる。

僕は深く呼吸しながら森の奥へと進んだ。

第十四話：螺旋

松林はいつの間にか鬱蒼とした原生林に変わっていた。

全身から噴き出してくる汗は森の湿っぽい熱気に包まれているからか、それとも得体の知れない恐怖から来るものなのか、僕にはわからなかった。

轍はとうになくなっていて、道標を残さずにここまで来た僕には戻るすがなかった。

けれど、確かにおぼえている。

僕はこの森へ来たことがある。

それはおぼろげな記憶だったけれど、間違いない。

足取りに迷いはなく。

僕は何かに向かって進んでいた。

手元に時間を計れるものがなかったから、今が何時なのかわからない。

微かに見えた陽は傾き始めていたけれど、まだ夕方というほどでもない。

もつとも、日が沈んでも僕は先へ進む気だったけど。

道と言えるものは存在していない。

多分、時間の経過が人を寄せ付けない土地へと変化させてしまったのだろう。

それでも、足はある場所を求めて先を急ぐ。

とげのある草を手でどけ、擦り傷を作る。

よそ行きの服はところどころ汚れ、草木に引き裂かれてぼろぼろになっている。

荒い息をしながら、僕はその果てにあるものへ向かった。

森は、突然途切れた。

目前には直径一キロぐらいはありそうな空き地が広がっていた。そこは深紅で染められていた。

視線を移せば夕日が僕へ向かってその身を輝かせていた。

それは何かを訴えているように思えた。

……僕には、それがわからなかった。

広場へ視線を戻す。

真ん中には、真っ赤に染まった鉄塔がそびえ立っていた。

頑丈そうな骨組みで作られたそれは僕の頭上遥か高く、ビル三階建て分ぐらいの高さはあった。

その中心には塔の周りを一周できるように組まれた展望台があった、そこへ行くには塔に張り付くように架けられた螺旋階段を上る必要があった。

僕はその塔を眺めていた。

一步が、なぜか踏み出せない。

息が今まで以上に荒くなる。

目の前の視界が歪む。

ふと、声が聞こえた。

目線を声が聞こえた方向、斜め下後方へ向ける。

そこを、三人の子供達が駆け抜けていく。

一陣の風が吹いた。

目線は三人を追いかける。

走ってここまで来たのか、三人は息切れし、肩を上下させる。

一人の女の子が笑顔で二人を見つめ、手を腰に当てる。

「もう、こんなんでへばってちゃダメじゃない」

一人の男の子は口をとがらせ、不平を言った。

「きついつてこれは。ねえ」

横にいた苦しそうな女の子も同意の頷きを見せる。

「ちょっと、休もうよ、ボク、疲れたよ」

ボク　？

微かな違和感をおぼえる。

この三人は、誰なんだ？

彼らに声をかけようとした。

けれど、声は音にならなかった。

そこから、僕は動けずにいる。

できるのはこの情景を見つめ、思考することだった。

「ねえ、あそこ、上ってみない？」

強気がちな瞳をした少女は鉄塔を指さす。

しばらく休んだおかげか、だいぶ整った息づかいだった。

汗を服で拭い、嫌みのない　汚れを知らない　笑みを浮かべる。

男の子は視線を一度そこへ向け、目を伏せた。

「あそこは危ないからいつちゃダメだってお母さんが……」

その一言を拒絶するための睨み顔を少女は返した。

「中学生になってまだ『お母さん』だなんて言ってるの？あ、こわ

いんだ、は」

「そんなことないよ、それに、今日は もいるし」

口を歪まして笑みを浮かべる少女は試すような視線を少年に投げかける。

少年はせめてもの抵抗を試みた。

話を向けられた少女は視線を彷徨わせ、答えを探していた。
しばらく重厚な沈黙が続いたあと、彼女は一つ、頷いた。

「ぼ、ボクは大丈夫だよ？ ちゃんと ちゃんがいれば、大丈夫」

その言葉とは裏腹に、声色は震えていた。

さつきまでのさわやかな風は無くなっていて、呼吸さえも止まり
そんな息苦しさが代わりに僕を支配していた。

三人の行動を注視する。

あの無垢な表情は嘘だったのだろうか、一人強気な少女の笑みは
邪悪を形容したそれに変わっていた。

目の前で三人が上っていく螺旋階段の先はどこに繋がっているの
か、僕は気づけば理解できなくなっていた。

第十四話：螺旋（後書き）

初めまして、青井みどり改め蒼井碧です。

更新遅れてしまつてすいません><。

これからは週末に更新する予定です。

ペースは遅くなりますが、これからも碧をお引き立てよろしく願
いします。

2008'02'09 Midori AOI

第十五話：邂逅

僕は三人の子供達の様子を眺めていた。

彼らにあどけなさは一切感じられない。

一人は卑しげな笑みを浮かべ。

一人は視線を不安げに彷徨わせ。

一人は顔を伏せ何かに耐えようとしていた。

それでも彼らの会話が途切れずにいるのはこの異様な空気からの逃避なのかもしれない。

見えない枷に拘束された僕は彼らを眺めているほかない。

五百メートル先、彼らの会話は耳に届かない。

彼らは作られた天上から何を見ているのだろう。

おそらく、森林にぶつかって風景は見えないはずだ。

一瞬、僕の方へと顔が向いたけれど目線が合うことはなかった。

見覚えのある顔、けれど僕はいちばん重要なことを思い出せないでいた。

しばらくしたあと、活発な少女が少年に耳打ちをした。

遠くにいたはずなのに、次の瞬間に見せた少年の表情が僕にははつきりとわかった。

目を一瞬だけ見開き、頬をわずかに引きつらせる。

それを悟られないように笑顔をつくり、もう一人の少女に視線を移した。

その背中にもう一言、少女がささやいた直後に少年の体がこわばる。

歯車が回り出した。

『展望台』の手すりは膝下ぐらいしかなく、低い。

少女は所在なげに身を乗り出している。

少年はその背中を見つめる。

暑さが、どこかに消え失せて、音もない世界に僕はいた。

そして少年は あの日の僕は 。

『夢はそこまでだ』

誰かの声。

夏が戻ってくる。

全身を包む気だるさと、肌の湿っぽさ。

耳につく虫の声。

背中に照りつける日差し。

僕が戻ってくる。

視線をあげれば、僕は立ち入り禁止の標示板の目の前で立ちつくしていた。

もう一度声がかかり、僕は慌てて後ろを振り向く。

そこには背の高い男性が立っていた。

僕は一度だけ見たことがある。

「賢治さん……」

穏やかな笑顔が陽に映える男性は柚季の執事をしている方だった。

「どうかしたのかい？」

僕はついさっきまで起きていたことを口にしようとする。

けれど、それはいつになっても形になつてはくれなかった。

もどかしさに苦しむ僕に彼は小さく首を振った。

「形にならない想いを無理に表そうとする必要はないんだよ。物事

が整理できたときに話せばいい。でも……」

彼は一回、指を鳴らした。

乾いた音が耳に響いた。

「形にしてはいけないものもあるんだよ」

何か、もやがかかっていく感覚。

形にならない想いが氷のように、緩やかに溶けていく。

それは、何か重要な記憶だったはずなのに、やがて原形をとどめなくなっていく。

「それよりも、君の友達が君のことを探していたよ。早く顔を見せたほうがいい」

ポケットをまさぐり、携帯電話を取り出す。

僕が逃げ出してから四十五分が過ぎていた。

なぜ逃げ出したのか、もう思い出せない。

とにかく、謝らなくちゃ。

僕は賢治さんに礼を言っつてその場をあとにした。

「さて、どういふつもりですか」

眼鏡の奥の目が冷たく光る。
やがて森の中から一人の女性が現れた。

「どういづつもり、とは？」

ラフなブルージーンに白い無地のシャツを着た女は不敵に微笑んだ。

八重歯がちらりと覗く。

「貴方はさつき観察対象#09007のLTMアクセスへ異常干渉しましたね？」

「あ？私に難しい話をしないでくれ、私は大学に行っていないからそういう話はさっぱりだ」

手をひらひらと振って受け流す女。

男はその様子が氣にくわないのか咳払いをして眼鏡を手の平で押し上げる。

「とぼけるのはいい加減よしてください。　なんであんな真似を」

「私は弟思いなんだよ」

忠告されてもなお、女は聞く耳を持たなかった。

後ろのポケットから潰れたタバコの箱を取り出し、よれたタバコに火を点けた。

「私はあんたらが氣に入らない。秀一の失われた記憶を取り戻す。その何が悪いって言うんだ？」

「その行為自体が許されていません。なんなら摘発してもいいんですよ？」

摘発、という言葉に体を震わせる。

しかし思いきり男を睨みつけ、抵抗の意志を見せた。

「それがあいつのためになるなら、私は死んでも構わない」

そう、女は掃いて捨てるように言って男の横を通り過ぎていった。
残された男は彼女とは反対方向の出口へと向かって歩き出した。
そう遠くない再会の予感を漂わせて。

第十六話：回答

必死になって走った。

僕は運動が得意ではないから、すぐに息が切れる。体も悲鳴を上げる。

それらを無視して、僕はまっすぐ走り続けた。どこに行けばいいか分かっていた。

少しずつ広がる不安を、精一杯の希望でかき消して。二人が待つ、あの場所へ。

「遅いぞ、仲川」

腕組みをする、僕の友人。

僕を搜してくれたから、汗だくになっていた。Tシャツが肌にへばりついている。

僕は肩で息をしながら、汗をシャツで拭った。そのあと、謝ろうと顔を上げる。

「ほら、秀一。これで汗、拭きなさいよ」

目の前に、眉尻を下げて微笑む柚季がいた。

彼女もしつとりと汗をかいていた。

ありがとう、と答えて受け取ると、櫻井が愚痴をこぼす。

「仲川にはくれて、俺には何もしてくれないのかよ」

「あつたりまえでしょ、なんであんなに優しくしなきゃいけないのよ」

うつてかわって、眉間に皺を寄せて怒り顔の彼女。

そのあとすぐに二人気づいたのか、僕の方へ向き直る。

二人が遠ざかっていく感覚を、また僕に与えてしまったんじゃないのか。

さっき僕が逃げ出した原因、一度は忘れかけた、強い疎外感。

……なんでそんなの感じたんだっけ？

僕はもう迷ったりしない。

だから僕は、

「だって、柚季は僕の恋人だもん」

そう、言葉を返した。

柚季は僕を好きでいてくれて。

僕も柚季のことが好き。

でも、その想いを一度は隠そうとした。

だって、僕は自分のことで精一杯で。

柚季のためにしてやれることなんて何一つもなくて。

そんな人間が、誰かを大切にできるわけがないと思っていた。

そう、思っていたけれど。

そんなことで、人を好きになることを諦めるなんて、間違っている。

その言葉を奈々姉から聞いたとき、気づいた。

精一杯だっていい。

無力でいい。

一人じゃないこと、それが一番の強さなのだから。

僕は柚季が好き。

その素直な気持ちを大切に、いつまでも抱き続けることで、それだけで互いを大切に思える。

それだけでいいんだ。

紅潮する彼女の頬。

僕の顔も大火事になっているんだろう。

櫻井は爆笑している。

めずらしいもん見た、と柚季を指さした瞬間に華麗な回し蹴りを食らっていただけだ。

「いたた……俺が一番苦労したんだぞ、お前らがなかなかくつつかないから」

腰に手を当てながら、櫻井が苦笑いする。

本当は僕たちを呼んだらすぐ消える算段だったらしい。

お節介というか、なんというか 親友冥利に尽きる。

僕は礼と微笑みを返した。

彼が頬をかく。

「いいんだよ、お前らが幸せになってくれたんだからな」

「あんたもあんたで幸せだしねー」

柚季に痛いところを突かれたのか、櫻井ののどが鳴った。

僕も後押ししてやろう。

そう思っ言葉を重ねた。

「香西だったら、僕の家でのんびりしてるんじゃないかな。遊びに行ったらきつと喜んでくれると思うよ」

彼は本当に照れくさそうに頬を赤くさせながら礼を言った。

櫻井が僕の家に向かう曲がり角に消えたあと、ぼそつと柚季が言葉をこぼした。

「細かいところ気にするのね、秀一」

僕が首をかしげると、彼女は僕が香西、と秋乃のことを呼んでいることを指摘した。

僕は本当に好きな人だけを名前で呼びたかった。今まで、そんなこと僕自身も気にならなかった。

でも、自分の好きな人が他の人に親しい呼び名で呼ばれていたら……と思うと僕は少しいやだった。

それは僕のわがままかもしれないけど、そう思った以上、それを曲げることはないのかな、と思う。

「だから、できれば僕のことだけ、名前で呼んでほしいかな……」

ばか、言われなくても私はしてる。

そういえば、そうだった。

「そんなの、あたりまえじゃない。……っていうか、私たち」

すごく似てるよね、と苦笑する。

うん、と僕は頷いた。

不器用で、傷つきやすくて。

けれど、それでこそ僕らだ。

同じもので泣いて。

同じもので笑みを浮かべ。

いつでも、同じ気持ちを共有できる。

「もう、怖いものなんてないよね」

僕たちはそう誓って、指切りをした。

家に帰ると、玄関に一人の男がたたずんでいた。

ずいぶんとしよぼくれた顔をしている。

家に入らない理由を訊くと、奈々姉に門前払いされた、と答え肩を落とした。

はて、彼女とは多少面識はあるはずだけどな、と思い僕から許可をもらいに行く。

それからしばらくして。

「何でだろ、許可が下りなかったよ」

まあ、それで彼を帰すのは忍びないと思ったので香西を連れてきた。

その時見せた櫻井の目の輝きようは言葉にするまでもない。

日が暮れるまでの約束で、二人は束の間のデートへ出かけた。

とても幸福そうな二人の後ろ姿を見送って、僕は部屋へと戻った。

第十七話：夏の幻

Part B : Whereabouts of summer .

友人に見送られ、俺は彼女の家を後にする。

隣には白の似合う少女。

彼女と再会した日と同じワンピースを身にまとして、現存するあらゆるものが霞んでしまう程の輝きを放つ。

俺はこれから何処に行こうか、と秋乃に話しかけた。

彼女は目を閉じ、考えてから答えた。

「健ちゃんと一緒になら、どこへでも」

眩しそうに細める視線の先には、傾きを強めていく日差しがあった。

あまり時間はないから、そんなに遠くへは行けない。

どうしようか思いあぐねていると、細く白い指先が俺のシャツの袖を掴んだ。

「ボク、海に行きたいな」

俺の喉元ぐらいの背しかない彼女に見つめられる。

回答を待つ秋乃は眉をひそめて今にも泣きそうにしている。

それが彼女の得意技だと分かっているにもかかわらず胸が詰まってしまう。

結局、俺が折れた。

住宅街の緩やかな坂を下り、防砂林を目標にして進んでいく。
歩いて行くにはきつい距離だが、話しながらならばその道のりも
遠く感じない。

しばらく迷路のような路地が続き、それを抜ければ国道に出る。
夕暮れに先を越されないように二人は少し早足で海を目指した。

国道へ抜けると沢山の自動車が往来していた。

海水浴客が帰路に着く途中のようだった。

無神経に騒ぐ人々を睨み付けるように進んでいく。

その途中、弱々しい力で腕を捕まれる。

振り向くと秋乃がいた。

少し息が上がっている。

無理させたことを謝るより先に、心配された。

俺はなんでもない、と答え、でも歩くスピードを緩めてシーサイ

ドラインを横断した。

薄汚れたねずみ色の砂。

一歩砂を踏む度目につく漂流物、ゴミ、釣り道具。

海は濃い緑に変色していた。

遠くへ視線を投げれば石油コンビナートが見え、煙突からは白い

煙が絶え間なく吐き出されていた。

俺はこの景色が大嫌いだった。

幼いとき、初めて見た海を忘れはしない。

すべてが透き通っていた。

そのすべてが壊された。

思い出は現実味を失った。

その絶望があまりにも辛くて、俺はいつのころからかこの海を避
けるようになっていた。

だから、秋乃と海に行くのは今日が初めてだった。

秋乃はずっと俺の側にいた。

何を言うわけでもなく、俺と同じ景色を見てくれた。

繋いだ手の冷たさが、心地よかった。

ただ、彼女はうつむいていて、そこから秋乃の表情を窺い知ることができない。

俺はしばらく彷徨い歩き、適当な流木を見つけそこに座った。

「おぼえてないかな……ここで、ボク達は出会ったんだよ？」

その言葉に息を呑む。

必死になって記憶を辿る。

見つかったのはこの場所を憎むようになったきっかけばかりで、本当に大事な記憶はどこかに埋もれてしまっていた。

秋乃へ顔を向けることができない。

後悔が胸を浸食する。

汚れたのは、俺の心だったのか？

「空も、海も見分けがつかなくて、ボクは驚いて動けなかった。ずっとぼうつとしてたら君が声をかけてくれた。空と海は兄弟なんだって」

……やっぱり、思い出せない。

俺は何処で落とし物をしてしまったのだろう。

それはいつか見つかるのだろうか。

答えはまだ出なかった。

その代わりになるかは分からなかったが、俺は一つの提案をした。

「ずっと北の方にある海は透き通っていてとても綺麗なんだそうだ。今度、一緒に行ってみないか」

横を向けばすぐ側に秋乃の笑顔があった。
どんな宝石にも変えられない輝きが目に眩しい。
彼女は強く、強く頷いた。

人気のなくなった砂浜を後にし、俺たちは防波堤で夕日が地平線へ沈む瞬間を待っていた。

日没までの約束だったが秀一だったら大目に見てくれるだろう。
俺は静かに、再会について考えていた。

秋乃と、五年ぶりに会った。

五年間という月日は一人の少女のことを忘れてしまうには十分すぎる時間だった。

忘れたんじゃない、逃げたんだ。

結局は忘れることなんて出来なかった。

いや、待てよ……。

何故、さっき違和感を感じなかったんだ？

俺のことは憶えていないはずなのに。

むしろ、立場が逆転していなかったか？

俺は慌てて秋乃のいる方へ向き直る。

「……あ？」

白い幻。

俺はいつからそれを見ていた？

記憶が歪みだしていく。

秋乃は 何者なんだ？

第十八話：後悔と無力

日が沈み、月が顔を見せ始める。

いや、月は隠れてなんかいなかった。

俺が気づかなかっただけ。

秋乃だって、幻じゃない。

何処にいるのか、分からないだけだ。

しかし。

俺は走り疲れて公園のベンチに身を放り出すようにして座った。

見覚えのない場所だった。

ブランコなどの遊具が申し訳程度に設置されている以外は広場になっ
ていて、全体的に閑散としている。

目を凝らすとその先は森林になっているようだった。

暗いのでよくは分からなかったが、立ち入ってはいけない雰囲気
だけは十分に伝わってきた。

俺はそこから目を逸らし、出口へ向かうために立ち上がった。

夜の公園で寒気を感じ、腕をさする。

鳥肌が、立っていた。

柄じゃない、とその身を奮い立たせようとしても寒気から逃
れることは出来なかった。

自然と、早足になる。

早足がだんだん駆け足に変わり、また走り出したとき何かにぶつ
かった。

恥ずかしさも分からないほど恐怖に染まっていた俺は尻餅を突い
て固まってしまった。

女か、俺は。

さらに次の瞬間、障害物がしゃべったときは頭が真っ白になった。

「君っ、大丈夫か？」

大人の女性の声。

幽霊を確信したきり、俺の意識はぶつつりと途絶えた。

再び目を覚ましたとき、俺は街灯の下にいた。

柱にもたれるように寝ていたため、背中がきしむような痛みを訴えていた。

痛みのひどい患部をさすりながら立ち上がると、聞き覚えのある声がした。

「君、本当に大丈夫か？」

目の前の幽霊にそう尋ねられ、かすれた叫び声が出た。
その態度にそれは首をかしげる。

……念のため、目を凝らしてそれを見る。
ちゃんと足は付いている。

黒のタイトジーンズにこれまた同じ色の無地のシャツ。
楕円形の眼鏡を掛けた彼女はどこか理知的な印象を与える。
染めていない長い髪は後ろに纏めていた。

「あれ、私と君は何度か顔を合わしていると思ったがな」

あまりに惚けていたせいで、言葉が出てこない。

「こら、なんとか言ったらどうだ」

そう頬をつねられてやっと意識が覚醒する。

「えっと、仲川秀一のお姉さん、ですよ？」

気付くのが遅い、と一喝された。

奈々さんだ。

俺ははっとなり忘れていた肝心事を思い出した。

「すみませんっ、秋乃を勝手に連れ出した挙げ句彼女を見失ってしまいい」

「いや、それは気にしていない。あの状況じゃ誰だって見失う」

あの状況　じゃあ、奈々さんは秋乃が消える瞬間を見ていたのか？

「たまたま見かけたんだ。声も掛けづらい雰囲気だったんで、秋乃に気づかれないように来た道を戻ろうとした。その前に、ともう一度振り向いた。それはわずかな時間だったのに」

「秋乃は、姿を消していたと」

ああ、と彼女が首肯する。

と、いうことは二人とも秋乃が消える瞬間を見てはいなかった。

「仕方ないから、君を追いかけてようとしたんだが、全然追いつかなくてね。やっと追いついたと思ったたら幽霊扱いされる始末だ。まあ面白い姿を見られたから構わないが」

恥の極致。

出来れば忘れてほしかったが、奈々さんのにやけ具合からしてそのつもりは毛頭ないようだ。

そんなことより、と話を元に戻す。

「秋乃は何処に行ったんだろうな……まさか、幻だったんじゃない」
「そんな訳、ありませんよ」

意識していなかったのに、言葉が口からあふれ出た。
予想していなかったのか、彼女が驚きに目を見開いた。
そして、静かに目を伏せた。

「すまない、冗談にも程があるよな」

申し訳のなさそうな消え入った声に、俺は首を振った。
俺だって、幻だと思った。

さっきの言葉は奈々さんよりも自分自身に呼びかけていたのかもしれない。

俺はそう思うことにした。

もう夜も遅い、ということであは家に帰された。

子供じゃないんだから大丈夫だというとまた一喝される。

「君まで消えたらシャレにならないでしょ」

……真顔でそういうことを言わないでほしい。

しょうがなく引き下がるかわりに、俺を家に入れてくれなかった理由を訊いた。

「私の都合が悪かったんだ」

そう答えたきり、彼女は手を振ってどこかへ行ってしまった。
俺は報告を待つことにして、自宅へと戻った。

自分の無力さが、
齒痒かった。

第十九話：ユメ ノ フチ

もしかしたら、熱に浮かされていたのかもしれない。
俺はベッドの上、ぼんやりとそんなことを思った。
ゆっくり目を閉じ、あの再会の日を思い浮かべた。

あてもなく街中を歩く。
特に用事もない。

部活はとっくに休みになっていたし、やってたところでフケるつもりだった。

家にいても窮屈なだけ。
ゲーセンでも行つて時間を潰そうか、と軽はずみに考えていた。
その道の途中だった。

最初に気づいたのは仲川秀一の姿だった。
細身の体型にははなよつとしたところは感じられない。
ただ低い背とさらつとした癖のない髪のおかげで女に見えるときがたまにある。

今日は見間違えることはなかったが。
その隣には気の強そうな目をした女の子。
あまりに明るく笑っているから、彼女が白石柚季だということに
気付くのが遅れた。

俺には文句ばかりでにこりもしない。
別にあそこまで微笑まれると逆に何か企み事があるんじゃないか
と思つて気味が悪いので構わないが。

向こうは自分のことに気付いていない様子だったので、そのまま
おいとましようかと思つた矢先、もう一人の存在に気付いた。
二人よりもずっと幼い印象。

白いワンピースを身にまとった彼女は線が細く、透き通った肌の色が清楚さを際立たせて見えた。

見ているだけで汗が引いていく。

長く腰のあたりまで伸びた髪が羽根のように見えて、神の使いにも思えた。

だが、俺はそのつぶらな瞳を憶えていた。
その笑顔も、全部。

相手が憶えてくれているかは確信がなかった。

だからといって、このまま背を向けてしまったらもう二度と会えないような気がした。

そんな後悔をするのだけはごめんだった。

徐々に距離が縮まっていく。

彼女は俺に気付いてはくれないだろうか。

と、先に俺の姿を認めたのか、仲川が俺に向かって手を振ってきた。

白石の肩をたたきながらはしゃぐ様子がまるで子供っぽく、俺は苦笑しながら手を振り返した。

なるべく自然を装って視線を少女へ戻す。

…… 柚季には気付かれてしまったようだ。

白石経由で仲川も少女へと視線を投げかける。
そうして初めて少女と目が合った。

鈍い反応。

再会は、決して喜ばしいものにはならなかった。

彼女は、俺のことを憶えていなかったのか。

どこか息苦しくて、俺は視線を外した。

苦し紛れに、仲川に茶々を入れる。

敵意のこもった白石の視線が痛かった。

この状態を続ける訳にも行かず、急だとは思ったが本題に入るこ

とにした。

と、いつでもどこから話を切り出せばいいものか　そう言葉に迷ったが、とりあえず自分の名を名乗り、自分のことを知っているか尋ねた。

彼女の回答を得るまでの数秒間、これほどまでに重苦しい沈黙を味わったのは初めてだった。

果たして、彼女は俺のことを憶えていなかった。
仕方のないことだ。

俺だって、彼女のことを責めることが出来ない。
彼女の顔を見て、初めて思い出したぐらいなのだから。
これは、きつと俺に科せられた罰だ。

大切な人だったのに、大切にし続けなければいけない人だったのに、俺は彼女から逃げて、あまつさえ彼女には自分のことを憶えてもらって欲しいだなんて、都合のよすぎる話だ。

俺が間違っていた。

だから俺は彼女に詫びの言葉だけを掛けて、この場から立ち去ろうとした。

だが、背中を向けることは彼女の言葉によって遮られた。

俺は構わない、とだけ言った。

その言葉の後にあるいくつもの感情を伏せて。

それに気付かれたのかは分からなかった。

彼女は俺の手を取り、言った。

構わないなんてことないよ、と。

自分のことは憶えてくれているのに、自分がそのことを憶えてないなんて、悲しいことだ。

そんな悲しい思いはしたくない。

だから、俺のことを必ず思い出す。

傍目から見れば不審者にしか思えないはずの俺に、彼女はそう言
って手を差し伸べてくれた。

俺はその信頼に本気で応えようと思った。

やがて、景色がぼやけてくる。

ああ、俺は泣いてるんだ、と気付いたのは自分の手の平に涙が落
ちて、その暖かさを知ってからだった。

それから、俺たちは沢山の話をした。

俺と彼女がどんな関係だったのか、あるいは二人それぞれのこと
について。

彼女はずっと意識不明のまま病院にいて、つい先日退院したのだ
という。

俺はその話になったとき、素直に謝った。

なんの変化もない彼女を見ているのが辛くて逃げ出したことを。

彼女はそんなこと、と言って笑って許してくれた。

いろいろなわだかまりが、ゆっくりと溶け始めていた。

それなのに。

俺たちは、何処で食い違ってしまったのか。

分からないまま、俺は夢の淵へと落ちていった。

第二十話：ユメ マボロシ

誰かが、俺の手を引いていた。

俺は静かに見上げる。

遠い視線の先に、穏和そうな瞳をした男の人がいた。
遠くを見やるその瞳を俺は知っている。

父さん。

俺は視線を彼から前へと向ける。

さつきからしていた潮の匂い。

その正体に一瞬、眩暈を覚える。

「どうだ、すごいだろう。俺たちが守ってきた海だ」

図鑑で見たよりもずっと砂浜は白く。

ずっと海は青かった。

そう、空との境界線も分らないほどに。

俺は父さんの手を離れ、波打ち際まで向かう。

その近くには日よけ傘の中で涼んでいる女性がいた。

俺は少しだけ迷い、やはり海へと向かった。

……彼女が悲しげに眉尻を下げたことには気付かないふりをした。

何度拭つても流れ落ちる汗、容赦なく照りつけてくる太陽の日差しにもかかわらず、海の水は心地よい冷たさで俺の小さな手を迎え入れてくれた。

海に入ってみたい、と思ったが俺はこの日水着を持ってきてはいなかった。

しばらく両の手を海にひたしたあと、名残惜しそうに海から離れた。

「きみ、なにしてるの？」

誰かに呼ばれ振り向く。

すぐ近くに女の子がいた。

俺より少し低い背。

ぱつちりとした目は澁刺さを物語るかのように輝いていた。

ショートボブの黒髪で、男の子のようにも見えた。

イルカの絵がプリントされているかわいらしいＴシャツとショー

トパンツのせいで、なおさら。

同じ質問を繰り返されて、やっと俺は言葉を返した。

父さんと一緒に海へ来たこと。

この場所に来たことは初めてだということ。

ただ、あの女性のことは言わなかった。

「ボク、まいにちここにくるんだ。だってこんなにキレイなんかも
ん」

突然吹いた風に目を細め、両手を広げる彼女。

俺は幼心ながらに彼女に惹かれていた。

広げていた両手を天に向け、背伸びをしたあと、彼女は自分の名
を告げた。

そして、最近引越してきたことを教えてくれた。

俺の家とそう遠くない距離だったので、もしかしたら同じ幼稚園
に編入されるかもしれない話すと少女は目尻を下げ、そうだった
らしいなと微笑んだ。

鼓動が早い。

その時自分が抱いていた感情がどう呼ばれるものなのかよく理解
できなかった。

彼女に微笑めばいいのか、何かを言うべきなのか迷う。

結論として、ただ彼女を見つめるだけで精一杯だった。

彼女も恥ずかしそうに目を伏せ、しかし意を決したように俺へ目配せをした。

「ボク、ひみつのばしょをしってるんだ。いつしょにいかない？」

俺は周りを見渡した。

あの女性はどこか遠くを見ていた。

父さんはどこかに行ってしまったようだった。

俺はしっかりと頷いた。

海の外れの方、海岸線がいったん途切れるきっかけになる場所。砂浜はいつの間にかごつごつとした岩場に変わっていた。

海とは反対の方へ目を向ければ川へと続く。

次の岩場への隔たりはとも遠く、目的地がそこではないことを自然が知らしめてくれていた。

彼女は川の方へと手を引く。

その途中に、その場所があった。

そこは、洞窟だった。

真夏だというのに鳥肌が立つほどに周りの空気は冷たかった。

クーラーみたいだね、と彼女は無邪気に笑ったから恐怖を覚えずに済んだが、一人で来ていたら決して近寄ろうとはしなかっただろう。

二人は闇の中へと包まれていった。

彼女はペンライトを持っていたため、視界が閉ざされることはなかった。

それでもしたり落ちてきた水が一滴肩に落ちただけで俺は身をこわばらせた。

その様子を見て彼女が笑う。

情けなさで体温が上がっていくのが分かった。

冗談交じりの言葉を交わしながら奥へとさらに歩みを進めた。

何十分歩いたのか分からなかったが、俺たちは洞窟の果てに辿り着いた。

広場のようだった。

壁へ光を当てると何かが輝いていた。

宝石のようだと思った。

水色の輝きが点在していて、それがただの岩ではないことを教えてくれた。

真ん中には青白く光る柱。

俺はそれを見つめていた。

今まで知らなかった場所。

幻想的で、寒さすら忘れていた。

彼女は柱へと手を触れる。

何かを祈っているようだった。

やがて、その場所を中心に光が溢れていく。

俺もその光に飲み込まれ。

第二十一話：夢みたあとで

目に白い輪が焼き付く。

瞳を閉じるとそれは青白い残像に変わり、紫へと変色する。

重たい瞼をこすり、身に付けっぱなしの腕時計で時間を確認する。日付が変わるにはまだ二時間ほどの余裕があった。

俺はベッドから起き上がる。

無理な姿勢で寝ていたせいか、少し体が痛い。

動けないほどではなかったので気にせず部屋を出ることにした。扉を閉める前に、机に目を向ける。

そこには写真立てが置いてあり、その中には懐かしい顔が飾っている。

父さんと、幼い日の俺が笑顔で映っていた。

あんな夢　過去　を見たあとで、彼のことを思い出さない訳にはいかなかった。

父さんは市レベルの自然保護団体に所属していた。

その中でも彼は先頭に立って精力的に活動していた。

かつての海が綺麗だったのも彼らが都市開発派と争い、勝ち取ったからだった。

大切なものは身を賭してでも手に入れる　父さんの口癖だった。言われたときには意味がよく分からなかったが、この年になれば理解できる。

今が、その時なのだということも。

もう一度、その言葉を聞きたかった。

だが、それは叶わない。

父さんは、殺された。

都市開発派の人間にリンチされた。

当然犯人達は捕まり、裁きを受けた。

しかし、都市開発派は反省するどころか首領をなくした自然保護派を潰しにかかった。

結局団体は離散状態。

父さんの死が無駄になった。

仲間が非人道的な手段で殺されたというのに、大人は誰も立ち上がろうとしなかった。

口を開けば無抵抗主義だとか生ぬるいことばかりをいう。

俺は周りの大人すべてを恨んだ。

だが、今まで俺も何もなかった。

無力を口癖にして、動かなかったのは自分が今まで恨んできた大人と変わりなかった。

そのことに気付いた俺は父さんの遺志を継ぐために何ができるのか、必死に考えている。

それが俺の義務なんじゃないか、と今思う。

ドアを閉め、廊下を歩く。

玄関に向かう道の途中、女性と出会った。

毎日会ってる顔だが、俺はそっぽを向く。

彼女は穏やかそうに、だがはつきりと震えた声で俺に話しかける。

「健くん、これからお出かけ？」

ああ、と俺は小さく返す。

ためらいがちな溜め息のあと、気をつけてね、と声がかかる。無視して、玄関を閉めた。

俺は、まだ物心のつく前に母親を失っている。

これは父さんの件とは関係がない。

彼女は病死だったという。

幼稚園に入り立てのころ、今俺の家にいる女性が来た。

要は義理の母だった。

俺は彼女の存在が理解できなかった。

それは幼かったということもあったし、それだけの理由ならこういったわだかまりや距離は生じなかったはずだった。

そのタイミングを、父さんの死によって見失った。

まだ彼女が何か行動に移したなら、俺も彼女を許せたのかもしれない。

だが、彼女も他の大人達と同様、何のアクションも起こさなかった。

俺はそんな彼女に一度だけ怒りをぶつけ、彼女に心を開くことを諦めた。

けれど。

今の自分はただの意固地に過ぎない。

いつか、ちゃんと彼女を許さなければ。

それは、あの時何もしなかった大人達を許すということ。

そして、自分自身を。

俺は、玄関越しに小さくごめん、と声を掛けた。

届くはずがないことは分かっていた。

だが、いつかは。

彼女を母さん、と呼べるようになるう。

そう、誓って俺は夜道を歩き出した。

真夏なのに、夜の海は寒いくらいだった。

月が雲に隠れてしまっているせいだろうか。

俺は砂浜へと降りると海岸線を頼りに秋乃のいると思われる場所へと向かう。

むろん、確信なんてなかった。

俺は馬鹿だから、思った通りに行動するしかやり方を知らない。

思いのほかその場所までは遠くなく、恐怖心も生まれてこなかった。

秋乃に会いたい。

あの無邪気な笑顔を見たい。

そんな簡単なことが、今は難しい。

何かを疑ってしまったから。

秋乃を信じてやれなかったから。

すべては、俺の責任だ。

やがて、俺は洞窟に辿り着く。

その手前に、彼女はいた。

岩場にアヒル座りをした秋乃は嗚咽を漏らしながら俺を見上げた。ばつが悪そうに微笑む彼女に何をしてやればいいのか分からなかった。

俺は静かに彼女を抱きしめる。

彼女の体はとても冷たく、降っていないはずの雨の匂いがした。

「ごめん、俺はお前を信じてやれなかった」

「うつん、誰だって忘れてること、あると思うよ」

そう言って、秋乃は俺から優しく離れる。

彼女は、笑っていなかった。

俺は、その瞳から意志をくみ取ることが出来なかった。

だが、そのあとの一言でその意味を知った。

「ボク、全部思い出したよ　　なんで、ボクから逃げたの……？」

それは、俺が忘れることの出来ない強い後悔だった。

第二十二話：心の行方

結局、彼女と同じ幼稚園に通うことはなかった。

それは単に彼女の両親が違う場所に行かせただけの話だったのでそれについて語ることはない。

それに、海へ行けば彼女に会うことが出来た。

彼女とはたくさんの話をした。

たくさん遊んだ。

だが、あの洞窟へと足を向けることは二度となかった。

無意識の内に避けていたのかもしれない。

互い、話題にすることもせず、その存在は意識の底に沈んでいた。

小学校からは同じ学校だった。

彼女が入院することになる中学一年の夏までは同じクラス、違ったところで一つ隣だったぐらいで俺たちは海で過ごした延長線上、よく二人でいることが多かった。

高学年になるに従って二人を冷やかす声が増える。

しかしそんなものはお構いなしだった。

どちらが告白するでもなく、まるで日常会話のような自然さなし崩し的とも言いが、二人は付き合うことになった。

付き合うといってもまだ小学六年だったし、普段とすることは変わらなかった。

二人でいれさえすれば幸せだった。

中学校に上がった。

一つ隣のクラス。

彼女に会えない授業の時間がとても窮屈だった。
十分休みですら一緒に過ごした。

晴れた日の屋上、二人で浴びる陽の暖かさが好きだった。
会話をしながらの帰り道はとも早く感じた。

わざと回り道をすることも多かった。

それだけの時間を共有したのに。

俺は彼女の異変に気がつかなかった。

何も知らないまま、その日は来た。

俺は自由研究の課題探しに中学生になって初めての夏休み、新聞を読むことを習慣にすることにした。

テレビは大体義母が使っていて、自分の部屋でゆっくり見る事が出来る新聞の方が便利だったし、新聞の内容をそっくり課題にしてしまうことも出来たのでかえって好都合だった。

その活字の中、埋もれるようにしてその記事はあった。

転落事故。

女児意識不明の重体。

漢字が単なる記号に見えて、何を意味しているのか読み取れない。じっと目を凝らして文字を見つめていると、騒がしい音が廊下に響き渡った。

珍しく義母の息が上がっていた。

切れ切れの言葉が吐き出される。

俺は義母に返事をすることも忘れて、私服のまま学校へと走り出した。

緊急集会。

どんな話を校長がしていたのか、俺には分からなかった。

集会が終わわり、俺は慌てて担任へと向かった。

見舞いに行くつもりだった。

俺の気迫に押されたのか、担任は病院の場所を示したメモをくれた。

最後まで話を聞かずに、俺は学校を飛び出していった。

だが、そこで俺を待ち受けていたのは面会謝絶、というたった四文字の言葉だった。

それでも彼女に会いたかった。

俺は近くにいた看護婦にすがりついた。

情けなくてもいい。

迷惑は百も承知だった。

白衣の女性が俺の名前を訊いてきたので素直に答える。

泣きじゃくりながらだったから上手く届いたかは分からなかった。けれど、彼女は了承してくれたようで、訊いてみると言ってくれた。

長いとも思える間があつて、一人の若い女性が現れた。

和服姿のその人は彼女の母親だった。

穏やかな笑みで、彼女は俺を迎え入れてくれた。

その日から俺は毎日病院へと足を運んだ。

彼女はいわゆる植物状態で、いつ意識が戻るのか、そもそも戻るのかさえも分からない状況だった。

俺はその状態から抜け出させるために何が出来るのか必死になつて方法を探した。

とにかく毎日語りかけること。

それが重要らしいことを知り、俺が一番出来そうなことでもあったので、一生懸命にその日起きた出来事なるべく楽しげに話した。彼女の母親もそれを手伝ってくれた。

二学期が始まって、彼女の身に何が起きていたのか、だんだん理解し始めた。

彼女は精神的な苛めに遭っていた。

すべてを把握してはいない。

話を聞くだけで精一杯だった。

誰が主犯格だったのかも訊かなかった。

そんなのを捕まえたところで誰のためにもならないと分かっていた。

誰かを、何かを恨んだところで彼女が喜んでくれるはずがない。

そのことを俺は過去に流した。

季節が変わっても彼女は目を覚まさなかった。

寒さが鼻につん、とし始めたころ、その日も俺は彼女と会話をし
て、病室を後にしようと席を立った。

その時、誰か俺の手を引いた。

彼女の母親だった。

彼女は俺は抱きとめて、しゃくりあげながらもいい、と告げた。

……俺も、分かっていた。

その日から、俺は病室へ足を向けることをやめてしまった。

そのツケが、これか。

第二十三話：存在

俺は、あの時分かったつもりになっていた。

彼女はもう目を覚まさないのだと。

あるべきはずの未来から目を逸らして、もっと身近な現実には逃げた。

彼女のことを忘れるわけじゃない。

そう、言い聞かせて。

彼女の存在が風化していく。

それはあつという間のことだった。

あれほどまでに、俺の時間は彼女で埋め尽くされていたのに。

思いのほかやるべきことはたくさんあって、気付けば彼女のことを忘れていくことの方が多くなっていった。

それからのことで、語るべきことはもうない。

最後には傷ついた少女と立ちつくすほかない男が残されただけだった。

そして今、俺は言葉に迷っている。

その言葉を彼女は待ち続ける。

視線は心を貫くかのようにまっすぐで、胸が強く痛む。

やっとの思いで出てきたのは単純な謝罪の言葉だった。

「……ごめん」

「許さない」

謝って許されるとか、何かをしたから許されるとかいう問題ではなかった。

何を言っただって同じ返答が来ると分かっていたのに、俺は馬鹿だからこんなことしか出来なかった。

いつまでも続く沈黙が、痛い。

その痛みがどれほど続いたのだろうか。

沈黙を破るかのように彼女は立ち上がった。

俺もついていこうと立ち上がる。

彼女は何も言わず、俺へ振り向くこともしなかった。
承諾と受け取って、俺は彼女の後ろを行く。

彼女は洞窟の中へと足を踏み入れた。

明かりはつけていない。

それと夜のためか、異常なほどの寒気を感じた。

目の前は闇だ。

彼女の足音を頼りに先へ進んでいく。

迷いのない彼女の足取り。

これから何が起るのか、俺には分からなかった。

……恐怖は得てして正体の知れないものだ。

俺はせめてすぐれるものとして、あの日の記憶と照らし合わせながらその場所へ辿り着くことを望んだ。

青白く光る柱。

闇の中にある唯一の光。

彼女は、そこへ向かっているはず　そう信じて。

やがて、俺たちはその場所を見つけた。

禍々しくも思えるほどの青。

その光に触れながら彼女は語り始めた。

「ボクは、君のこの他にもいろんなことを忘れていた。今までは

それに気付いてなかっただけ」

ボクが入院していた理由は事故なんかじゃなかった。
ボクは、殺されかけた。

ボクには二人の友達　少なくともそう呼べる人　がいた。
どんなに学校で酷い目にあっても、二人は優しく接してくれた。
いつまでも、そうしてくれると信じていた。
なのに、苛めの主犯格が、その二人だった。
用事があつてボクは教室を出た。

そしてそれを済ませて部屋へ戻ろうと引き戸の取っ手に手をかけ
ようとしたとき、その中から声が聞こえた。

会議のようだったので、ボクは学級会か何かだと思って参加しよ
うと引き戸に手をかけた。

ボクと目があった生徒の顔があからさまに引きつっていた。

ボクは何も知らずに黒板へと目をやる。

絶句した。

そこには、これからボクをどうやって懲らしめようかという提案
が箇条書きにされていた。

何をしたという訳でもなかったのに。

何故、ボクが彼らの怒りを買ったのか分からなかった。

その時にはボクの何がいけないのか分からなかった。

それ以上に衝撃だったのは、議長役の二人がいつもボクと仲良く

してくれていた二人だった。

裏切られることには慣れていた。

けど、この二人には裏切られなくなかった。

ボクが悲しみに体を震わせていると、クラスの誰かが明確な理由をボクに教えてくれた。

……お前、むかつくんだよ。

なんて理不尽な、それ以上に説得力のある言葉だった。

また別な人が立ち上がる。

これから何が行われるのか知るよしもなかったボクは、小さな体を強ばらせることしかできなかった。

もう一度黒板に目をやる。

ある箇所が丸で大きく囲まれていて、ボクはその一文に目を通す。絶望が、この身を襲う。

ボクはクラスの男子と、見物客の女子に囲まれ、当時もう使われていなかった古い屋舎へと向かっていた。

時間は放課後、わざわざ近づくような人はいない。

誰かが建物の扉を開ける。

合鍵。

陽の光だけが入る部屋、全員が入ったところで再び戸が閉められる。

黴臭い。

中央に敷かれたマット、乱暴な腕によってボクはそこへ転がされた。

恐怖がボクの頭を支配する。

寒くもないのに歯ぎしりが止まらない。

優しくしてあげるから。

下品な笑み。

無邪気を装った手がボクの頬へ触れる。

わざとらしい空気作りにどこからか野次が飛ぶ。

ボクはそれでも身をゆだねる他なくて、その瞳を見つめる。

そこには何も映っていなかった。

目をつむれ、と柔らかい声で指示され、ボクはその通りにする。

唇に触れたのは生暖かく、ざらざらとした感触。

それからのことは吐き気がするほどまだ頭にこびりついている。

まだ大切な人にも見せたことのなかった裸身をクラスの人間に晒され、欲望に陵辱された。

最後の陵辱が終わるころには、ボクは腐臭と体液にまみれていた。それを拭き取るのは今まで友達だと思っていた女の子。

泣きながら、ボクに謝るふりをしている彼女。

ボクはそれでも彼女を許そうとする。

笑い方を忘れてしまっていた。

泣くこともよく分からなくなっていた。

言葉はかすれて、彼女に届かなかった。

脱がされた制服を着直し、外へ出るともう一人の友達であった男の子が待っていた。

彼には何もされていない。

けれど強力な拒絶がボクを襲い、そのまま吐いた。

そんなボクを彼は抱きしめる。

あの恐怖が体を覆い、小刻みだった震えがまた強くなっていく。

もう二度とこんな酷い目にはあわせはしないから。

彼の言葉に薄ら寒くなる。

だったら、何で止めてくれなかったの。

彼も彼女も同罪だ。

彼らはボクに明日仲直りの意味を込めて三人で遊ぼうと提案をした。

ボクは生返事をする。

もう、勝手にして欲しかった。

次の日が来て、二人はお迎えに来てくれた。
ボクが逃げ出さないように。

左手と右手、それぞれの手を繋いだ。

……ボクが逃げ出さないように。

楽しそうに話す二人に相づちだけを返す。

何の話なのか耳に入ってこないのだから。

目的地の公園までは、あと少し。

公園に着いてから、少しだけ遊具で遊んだ。

頃合いを見計らったかのように彼女が彼を誘う。

……ねえ、森の奥へ行こうよ。

いやがる仕草が演技なのか素のものなのかよく分からなかった。

結局、三人は立ち入り禁止の低い柵を越えて森へと続く松林へ足を踏み入れた。

途中、彼女が走り出す。

何故か、その背中を追いかけた。

止まればよかったのに。

逃げればよかったのに。

ボクはそれが出来なかった。

前の日のこともあって、正常な判断が出来なくなっていたのかもしれない。

ボクは、生ぬるい風を受け、走った。

やがて、三人は開けた場所に辿り着く。

その真ん中には鉄塔。

それを指さし、上ろうと誘う彼女。

彼はいやがった。

ボクにはその選択肢が用意されていなかった。
だからボクは構わないと返事をした。

その結果、彼女の術中にはまったボクは彼に突き落とされた。

外傷は複雑骨折程度で済んだものの、頭を強く打ち付けたために
植物状態の後遺症が残った。

目は見えなかった。

体も動かない。

唯一機能していた器官が耳だった。

だから、あの時に健ちゃんが話してくれていた言葉は全部聞こえていた。

帰り際に言ってくれた照れくさそうな好きという言葉、本当に好きだった。

その好きも、完全に途切れてしまった。

そのうち、ボクの病室には誰も訪れなくなった。

再び目覚めた理由は分からない。

とにかくそこからの快復力は自分でも異常だと思っただった。

ただ記憶の欠損には気がつかなかった。

彼のことはいい印象しか残っていなくて。

彼女のことに至ってはボクは完全に忘れていた。

そして 健ちゃんのこと。

帰る家もなかったボクはたまたま再会した彼の家に居候することになった。

彼は記憶を失っていて、ボクのことにはうる覚えだった。

その彼のもとにももう戻れない。

思い出してしまったから。

ボクは 。

「ボクは、これから復讐に身を焦がすことになると思う。だからもう、会つのはやめよう?。」

醜い自分を見せたくない、と彼女は苦笑いした。
そして、青白い光は二人を包み。

第二十四話：北へ。

あれから、丸一週間が経った。

何もする気が起きなくて、ただ暇を潰していたらもう夏休みは一ヶ月を切ってしまった。

久しぶりに部屋の窓を開け、外の空気を入れる。

外には騒がしさがあふれかえっている。

それらと関係を絶つことは簡単だ。

だが、いつまでもそのままという訳にはいかないと思う。

何かを、変えなければ。

まずはどうすればいいのだろうか？

俺はとりあえず、リビングへ向かうことにした。

そこでは、朝食の用意をしている義母の姿があった。

以前は彼女に声をかけられてから部屋を出ていた。

だから、彼女が料理をする姿を見るのは初めてのことだった。

まずは、ここから変えてみよう。

ゆつくりと、彼女に届くように言葉を紡ぐ。

義母さん、おはよう。

たったそれだけの言葉をものすごい時間がかかった。

彼女は料理をしていた手を止め、俺の方に向き直ってくれた。

その言葉を待ったために。

義母さんはひし、と俺を抱きしめてくれた。

耳元にこめんなさい、と小さな声がかかる。

疲れの見えるその声。

ああ、俺はこんなにも苦勞をかけていたんだ
後悔が身に染みた。

二人は、たくさん話をした。

その中で、彼女が現在海を再生しようという運動を始めたことを知った。

ずっと、準備を進めていたのだという。

俺に相談してくれればよかったのに。

そう言つと、彼女はくすぐつたそうに微笑みながら、言った。

「健のこと、驚かそうかと思つたの」

その微笑みの中に揺れるとまどいに、俺は気付いている。

けれど、それを指さしたりはしない。

だから笑つた。

やつと、俺たちは親子になれた。

義母さんに声をかけてから、家を出た。

街まで出てみるのもいいかもしれない。

ただ、まだ整理できてない問題が山積している。

その山に埋もれて、まだ身動きが取れずにいた。

どうすべきか、今は答えを持ってないでいる。

だからこそ、あの二人には会いたくなかった。

街に行けば、出くわしてしまうかもしれない。

会つて、二人に笑える自信がなかった。

なるべく二人が使わないような路線を使おうと思つて、いつもと

違うバスに乗り込んだ。

街とは逆方向だということは乗ってから気がついた。

だが、降りることはしなかった。

こんなのも、たまにはいい。

その車は大げさに体を揺らしながら俺を遠くまで運んでくれた。

方角は、北。

たっぷり、二時間の移動だった。

シーサイドラインを走ったバスから降りると、途端に息が詰まりそうになった。

冷気に当てられた分、肌に感じる熱気はそれ以上のものとなる。

太陽は真上で知らん顔をして燃える。

俺は汗を拭いながら砂浜の入口を捜した。

砂浜に人影はなかった。

記憶どおりではなかったがそれでも十分すぎるほど美しい場所なのに、どうしてだろうか。

長い石段を下り、白い地面の上に立つ。

スニーカー越しに、熱が伝わる。

その熱が今は心地よかった。

俺はまっすぐ海へ向かって歩いた。

彼女と初めて出会ったときのことを思い出し、溜め息をついた。

あの洞窟の中で青白い光を見たのは二回。

最初はただの幻覚だった。

二人は洞窟にいて、何も起こらなかったことに不服だった彼女が俺の手を引いた。

それから、長いのか短いのかもよく分からない時間が流れた。

二回目。

青白い光が二人を包み、はじけた。

そこに彼女はいなかった。

どうやって洞窟から抜けたのか、俺はよく憶えていない。

それどころか、気付けば自分の家の玄関に立っていた。

ひどく疲れて、何も考えなくなかった。

彼女を捜すこともせず、食事以外の時間はひたすら眠った。

目を閉じると、睡魔はいつでも俺を夢へと誘ってくれた。

夢、といっても何を見たかはもう思い出せない。

ただ、彼女の夢だけは見なかった。
それだけは確信する。

海はただ広く、ただ青い。

海は悲しみに暮れる人を癒し、代わりに涙を流す。

だから青いのだ、と教えてくれたのは父さんだった。
今、俺は悲しいのだろうか。

癒されたいのか。

青は、答えない。

海はただ広く、また、ただ青かった。

当てもなく、砂浜をぶらぶらしているとその向こうに人がいた。
濃いグレーのスーツは少なくともこの場所には不釣り合いだった。
長い時間見つめていたのか、向こうに気付かれてしまった。

男の人だった。

穏やかな笑みを浮かべ、俺へと近づいてくる。

だが、怖いとかそういう感情は浮かなくてなかった。

大声を出さずとも会話できる距離まで近づいて、彼は俺へと会釈した。

どこか、父さんに似ているような気がした。

第二十五話：遠くへ

「それにしても、静かだな……」

海の方こうへと目をやり、小さく呟く男の人は自分のことを林賢治と名乗った。

先日まで白石柚季の執事をやっていて、今は暇を出されたいらしい。人の寄りつかない海があると聞いて、することもなかったのここまで遠出したという。

前半のことは初耳だったが、遠出した理由は俺と同じだった。黒い髪を後ろへなでつけて、小さな丸眼鏡を鼻に掛けている。

思い出したかのように、止まっていた時間が動き出すように彼は俺に向き直って訊いた。

煙草を吸ってもかまわないかという確認だった。

俺は頷きだけを返す。

「煙草を吸うのは十年ぶりなんだ」

確かに、彼からは喫煙者特有の匂いがしなかった。

今の職　暇は出されたものの　に就いたときに止めたのだという。

いきさつを訊こうとして、遮られた。

訊かなくとも、彼が語った。

「止めた理由も、再び吸い始めた理由もない。何となく吸わなくなつて、何となく吸い始めた。君には分かるか」

俺は分かる、と答えた。

小学生のころに何ともなしに始めた野球、きつと何となく辞める

んだろう。

それはとても自然なことだ。

「そう、人は意識的に行動するべきじゃないんだ」

その言葉の意味はよく分からなくて、俺は曖昧に頷く。

だが彼はそれ以上の説明をすることなく、話を切り上げた。
目を閉じ、煙を吸い込む。

瞼が開くと同時に煙は空に届くことなく、舞い、消えた。

「君は何でここに来たんだ」

責める口調でも、逆に子供をなでるような優しいそれでもない。

無関心、という言葉が一番似合うだろう、と俺は彼の声を聞いて
思った。

ここに来た理由なんて、ない。

何かを探していたのか、何かから逃げていたのか、それも明確で
はなかった。

分からない、俺の唇はそう答えた。

その話も、それで終わり。

今更、俺の名前と年齢を尋ねられる。

それを聞いた林の表情が変わった。

あからさまな反応でなくとも、微かに引きつった頬と瞳孔が開い
たことで理解した。

「じゃあ、柚季のことは知っているんだな」

俺は頷く。

さっきそのことを言うのを忘れた、とも答えた。

納得したのか、どうでもよかったのか彼は次の質問に移った。

「じゃあ、彼女が犯した罪も知っているのか」

一人の少女の悲劇。

俺はただ知っていると答えた。

秋乃のことは伏せた。

素性もよく知れない相手にすべてを話すべきではない。

だが、それを尋ねられるのも時間の問題だな、とも思った。

短い会話の内にどれだけの時間が経っていたのだろう、彼は短くなつた煙草を携帯灰皿につっこんで新しい煙草に火を点けた。

やはり、話題はそれへと移る。

「香西秋乃に、会ったんだな」

念を押すような口調、しかしそこには確信が込められていた。

俺は彼女のことを話す前に、一つだけ確認した。

「林さんは、彼女を知っているんですか？」

名前でいい、と苦笑混じりに質問と関係ない回答を返して、しばらく遠くを見やる。

そして、踵を返す。

俺があっけにとられていると、声を掛けられた。

「おい、お前も飯に付き合え。 長くなるんだ」

シーサイドラインを横切り、松林を抜けると国道に出る。

その車はハザードをつけっぱなしにしている、エンジンも掛かったままだった。

それでも盗難に遭わないところが他の国とは違ふところだ。

フォルクスワーゲンのオープンカーだった。

運転中、もつといいもんが欲しかったんだけどな、とハンドルをさすりながら言った。

彼が笑うとき、眉間に軽く皺が寄る。

それは父さんにはなかった癖で、俺はやつと彼を林賢治単体として認識できた。

どうしても大人の男の人を見るとあの人の面影を探してしまう。似ていれば、似ているほど。

制限速度を超え、車は直線道路を快走する。

風は肌に張り付いていた汗を洗い流すように強く吹き抜ける。

俺はしばらくその風に身を委ねた。

このまま、俺を遠くに連れ去つて欲しい、と不意に思う。

違う街で、新しい暮らしを試みたい。

そのまま二人に会うこともなく、古い記憶が風化してしまえばいい。

その間に、彼女が復讐の鉄槌を下すだろう。

すべてが、俺の知らない場所で進んでいく。

関わらずにいられたら、どれだけ楽になれるんだろう。

第二十六話：交錯し続ける場所

程なくして、車はスピードを緩め、止まった。

少し乱暴に林はドアを閉め、目線の先にある建物を見つめる。ほぼ睨んでいるに近い。

規模は大きく、学校にも似ている。

白いコンクリートの外壁はところどころひび割れていた。

だが、廃墟、という訳ではない。

単に施設が古びてしまっているだけだ。

たとえば庭園では車いすに乗っている患者がいたし、ベンチに腰掛けて弁当を広げるものもいた。

よくある田舎の病院の風景だった。

何だつて食事どころにここを選んだのか、訝しがりながら俺は自動ドアを抜け、建物の中へと入っていった。

古びた外見とは裏腹に、内装はしつかりとしている。

それは姑のごとく細かい箇所を指摘すればきりがないのだが、一目見れば清潔な印象だった。

しばらく玄関の近くで待っていると駐車を済ませた彼が遅ればせながらきた。

もう睨み顔は消えている。

だいぶ走ったからなあ、腹減ったろう？

苦笑気味な彼の問いかけに俺はおなかをさすり、もう限界だと訴えた。

「味は悪いが、ちょっと勘弁してくれ」

その言葉に俺はわだかまりなく素直に笑い、二人は遅い昼食を摂ることにする。

……不味いという訳ではないが上手いとも言い難い、コメントの
実にしづらいラーメンを無言で食べ終え俺たちは上の階へ向かう。
味のせいではないだろう、さつきから林は沈黙を守っていた。

下手に話しかけても気まづくなりそうだったので俺も口を開けず
にいた。

やがてエレベーターは目的の階に着く。

廊下へ出ると薬品の匂いがより一層強くなった気がした。

受付に顔を出す彼に背を向けるように、廊下の奥の方を見つめる。
自分でも分かるほどにしかめ面をしているのは鼻につく消毒液臭
さと無音の世界に響く不協和音に耳を澄ませるためだ。

何故そうしたのか、そうしなければならなかったのかは分からな
い。

林に肩をはたかれ、それから正気に戻ったくらいに俺は虚空を睨
み続けていた。

彼に促され、俺はこの病棟の一番奥にある部屋へと案内された。

規則的な電子音のみが存在を示す。

クリーム色の壁は目に優しく、しかし視線を下に向ければそれは
くすんでいた。

ただただ、広いその部屋の窓際、陽の光が差す場所にベッドが置
かれていた。

他には近くに小さな棚。

ベッドには、小さな、やせた頬があった。

その表情からは微笑みも、苦しみも、悲しみも怒りさえも感じら
れなかった。

でも、それはそう見えるだけだ。

彼女はあの日々を、そして俺を強く恨んでいる。
もう二度と、許してもらえないのかもしれない。

でも、言葉にしなければ、誓わなければ。
復讐なんか身を焦がす、その前に。

俺、お前を迎えに来たよ。

今まで、酷いことをしてごめん。

もう、お前から離れないから。

お前が好きだから。

だから、復讐なんかしないでくれ。

誰かを傷付けることをしないでくれ

秋乃は、ちゃんと聞いてくれただろうか。

言葉は、届いてるはず、あとは彼女がそれを受け入れてくれるか

.....

病室の外へ林は出ていた。

俺は彼に今日は彼女の側にいたいと告げた。

話したいことが、数え切れないほどある。

彼は一つ頷きを返し、明日の朝迎えに来ると答えた。

病室に戻り、俺は彼女の手を握る。

今街のどこかを彷徨う彼女の心を引き戻さなければ。

俺は微笑む。

「さて、何の話からはじめようか？」

「あら、ここであつたが何年目かしら？」

「やけに古くさい科白ですね、あとその口調はあまりにも似つかわしい」

「文句があるならもつとはつきり言えばどうだ？」

本当お前は冗談の通じない奴だ、とぶつくさ言う女が不覚にもかわいらしく思ったことを男は黙って墓場まで持って行こうと誓った。

「……で、今日は何の用なんですか？」

女は不機嫌そうに目を細め、溜め息をつく。

「『彼女』が動き出した」

「動き出したといっても彼女は生身ではないですし、それゆえ危害もないのでは？」

男がそう樂觀視したのは、今町を徘徊している香西秋乃という人物が実在しない　言うなれば生き霊のようなもの　だと考えたからだった。

実際そうだった例は多く報告されていたし、その場合の駆除も容易だったため、軽く受け取ったのだった。

女の眉が深く皺を刻む。

「何を言ってるんだ？アレは幽霊なんかじゃないぞ……そうか……お前は重要なことに気付いてない。」

睨み顔を病院へと向ける。

捨てるように言った。

「私が言っているのは姉の方だ。この病院で眠っているのは妹。……お前はいつも情報収集力に欠けるな。紙だけじゃ真実は分かん

と、何度言えは分かるんだ？」

P a r t B : W h e r e a b o u t s o f s u m m e r ,
f i n .

第二十六話：交錯し続ける場所（後書き）

一ヶ月も放置でごめんなさい＞＜；

これからまた違う視点になります。
時間軸的にはまた戻る形に……

これからもよろしくたのんます！

第二十七話：移ろいゆくもの

P a r t C : M e l a n c h o l y o f s u m m e r .

青白く、ただ青白く。

光との契約を私は交わす。

言葉も、文字もいらない。

私はそれを受け入れる。

この街に戻ってきたのは五年ぶりだ。

駅前には当然だと言わんばかりに新しいビルが建ち並び、それは再来してきたものを強く拒むかのようにだった。

嫌いな人混みをすり抜け、バスに乗り込む。

古びた鉄の箱はくたびれた人々を運んで中心部から遠ざかっていく。

その先に、私の目指す場所はある。

心地よく揺られ、ついうとうとしてしまった。

目をこすりながらバスを降りる。

とある住宅街、時刻は昼過ぎ。

バスどおりを背にして、緩やかに、高みまで続く丘陵地にそれは

なっていた。

その先が森になっていることから、元々は山の一部だったのだらう。

それを切り開き、崩し、土地にした。

そのことについて、私はどうとも思わない。

第一、初めてここへ来たときからこれはこうなっていたのだ。

私は自然保護団体の人間じゃないし、それは私の目的とは大きく逸れている。

だから、私は目線を森から目先の道路へと移し、細い路地に入ることにした。

……といっても私はそれほど記憶力のいいほうではなかったので、かろうじて思い出したのはかつて自分が住んでいた家だった。

分譲地で、今思えば馬鹿みたいな金額で売られていた家。

それなりにいい家だった。

悪かったのはその家に住んでいた人たちの方だ。

母親を亡くし、抜け殻のようになった父。

苛めを受けていた妹。

無力だった私。

手放したあとはどうなったのだろう。

誰かが住んでいるのだろうか。

それならば、出来れば誰も不幸になっていませんように。

あわよくば、更地になっていきますように。

そして、見覚えのある場所で私の足は止まった。

そこは、やはり、雑草の茂る空き地へと変わっていた。

苦しみしか残っていない場所。

それでも……私の生きた場所。

たまたま通りかかった初老の女性に話を聞くとこのようになったのはつい最近の話らしい。

私たち一家がここを背にしてからはずっと空き家になっていた、とずいぶんとのんびりした口調の彼女は語っていた。

誰も不幸にならずに済んだのか。

果たしてそうしてよかったのかは分からなかったが、私は胸をなで下ろした。

彼女と別れ、しばらくその空き地を眺める。

母親が笑っていたころの幸福を思い出しかけ、思わず頭を振る。

あの日々など、もうとつくのとうに過去のものだ。

そんなものに、いまさら何の価値があるんだろう。

その代わり、今も意識を取り戻さない妹へと誓った。

私が、彼らに復讐してあげる。

貴女が晴らせなかった無念を、この手で空に返してあげる。

だからもう、

『目覚めてよ』

……その言葉は空の青に混じり合って蜃気楼に溶けた。

誓ったはいいが、事前の調査では二人の居場所を突き止めることが出来なかった。

普段から二人と私は関わりがなかった。

かろうじて手に入れた情報は二人の顔写真。

それも中学に入る前のものだから、あまりあてには出来ないのだから。

二人のそれを眺めるたび、引きちぎってやりたい衝動に駆られる。

だが、今は冷静にならなければいけない。

先ほどの女性を見る限り自然と受け答えをすれば怪しまれないようだった。

それをつてにすれば辿り着くだろう。

あくまで希望的観測。

それでいい、と私は昔の土地から離れることにした。
喜びと悲しみが同居していた、かつての場所から。

しばらくほつつき歩いていたが人っ子一人としてない住宅街は熱を帯びているだけで、このまま歩いていても体力を奪われてしまうと判断した私は木陰のある小さな公園で休むことにした。

自販機のジュースは冷え切っていなかったものの十分冷たく、熱を冷ますには心地よかった。

どうせ今日見つからなくても明日がある。

まだ学生の私には必要以上の時間があつたし、途中で金を切らしたらかたない、家に帰ればいい。

いつこうに和らこうとしない日差しを待つのに嫌気がさし、私が再び立ち上がろうとしたとき、

「あ
」

自分の頬の引きつりを、確かに感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2385d/>

夏陰

2010年10月10日06時45分発行